

# 東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 1994年度 —



1996. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

## 例　　言

1. 本書は財團法人東大阪市文化財協会が、東大阪市の委託を受け、平成6(1994)年度に実施した下水道管渠築造工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 本書には池島遺跡・西ノ辻遺跡・瓜生堂遺跡・若江遺跡・日下遺跡で実施した9件の発掘調査の概要をおさめた。このうち瓜生堂遺跡第39次調査は整理作業の終了に伴い、遺物編として報告するものである。6年度に実施した上小阪遺跡第5次調査は次の機会に報告する。また、下水道関係の調査参考資料として、日下遺跡第14次調査の概要を第10章に掲載した。
3. 調査は以下の事務局体制によった。(1996年3月31日現在)

理事長	日吉 亘(東大阪市教育委員会教育長)
常務理事	西脇 実
事務局長	杉山浩三(東大阪市教育委員会社会教育部文化財課課長代理)
庶務部長	杉山浩三
調査部長	芋本隆裕(東大阪市教育委員会社会教育部文化財課主査)
調査副部長	松田順一郎 中西克宏
調査部員	上野節子
庶務部員	朝田直美
	大林 亨
	村田周亮

4. 各報告は調査主担当者が執筆し、分担は次のとおりである。編集は金村が行った。

第1・4・6・7章	金村浩一
第2・10章	三輪若菜
第3・5・7章	井上伸一
第8・9章	曾我恭子

5. 遺構実測の基準には国土座標第VI系を使用し、図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。水準高にはT.P.値を用いた。基準点は委託して設置したものがある。
6. 土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に準じたが、夜間調査等には主観によって判断したものがある。
7. 本書に収録した遺構写真は各担当者が撮影し、遺物写真は(株)スタジオG Fプロに委託して撮影したものである。
8. 調査にあたっては東大阪市建設局下水道部の援助とともに、施工業者ならびに近隣市民各位の御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。調査・整理作業には多数の補助員が参加した(P.55)。

## 本文目次

第1章	平成6年度の下水道関係調査について	1
第2章	池島遺跡第13次調査報告	5
第3章	池島遺跡第14次調査概要	9
第4章	西ノ辻遺跡第37次調査報告	17
第5章	瓜生堂遺跡第41次調査概要	23
第6章	瓜生堂遺跡第39次調査報告（その2 遺物編）	29
第7章	若江遺跡第56次調査概要	37
1	はじめに	37
2	調査概要	38
1)	A地区	38
2)	C地区	38
3)	B地区	40
4)	D地区	40
5)	E地区	40
3	まとめにかえて	42
第8章	若江遺跡第57次調査概要	43
第9章	若江遺跡第58次調査報告	53
第10章	参考資料・日下遺跡第14次調査報告	57

## 挿図目次

第1図	遺跡分布図(S=1/50,000)	2
第2図	夜間調査風景(上小阪5次)	3
第3図	調査地位置図(S=1/2,500)	5
第4図	鳥巣状遺構	6
第5図	畦畔	6
第6図	池島遺跡第13次発掘調査土層断面図	7
第7図	出土遺物実測図	8
第8図	調査地位置図(1/2,500)	9
第9図	東壁断面図(1/80)	11
第10図	遺構平面図1(1/100)	12
第11図	遺構平面図2(1/100)	13

第12図	遺構平面図3(1/100)	14
第13図	調査地周辺図	15
第14図	西ノ辻遺跡第37次調査地位置図(S=1/2,500)	17
第15図	西ノ辻遺跡第37次調査S P01出土遺物(S=1/4)	18
第16図	西ノ辻遺跡第37次調査平面図・断面図(S=1/100)	19・20
第17図	西ノ辻遺跡弥生時代中期遺構概略図(S=1/2,500)	21
第18図	調査地位置図(1/2,500)	23
第19図	東壁断面図(1/60)	24
第20図	遺構平面図(1/120)	25・26
第21図	瓜生堂遺跡第39次調査地位置図(S=1/2,500)	29
第22図	瓜生堂遺跡第39次調査土層断面図(S=1/100)	30
第23図	瓜生堂遺跡第39次調査第2層出土遺物実測図(S=1/4)	31
第24図	瓜生堂遺跡第39次調査北端部第2層出土遺物実測図(S=1/4)	32
第25図	第39次調査第3層遺物実測図(S=1/4)	33
第26図	若江遺跡第56次調査地位置図(S=1/2,500)	37
第27図	鏡形石製模造品実測図(S=1/1)	38
第28図	若江56次発掘調査C地区板状木製品出土状況	39
第29図	若江56次調査B地区遺構平面図(1/120)	41
第30図	若江遺跡第57次調査位置図(S=1/2,500)	43
第31図	若江遺跡第57次平面図	44
第32図	若江遺跡第57次調査 土坑1実測図	45
第33図	若江遺跡第57次調査 土坑1出土瓦器輪・土師器皿実測図	46
第34図	若江遺跡第57次調査 土坑1出土瓦器輪・土師器皿実測図	47
第35図	若江遺跡第58次発掘調査位置図(S=1/2,500)	53
第36図	若江58次平面図	54
第37図	若江遺跡第58次調査地西壁土層断面図	54
第38図	調査地位置図	57
第39図	土層断面図	58
第40図	調査区平面図	58

## 表 目 次

第1表	平成6年度下水道関係発掘調査一覧表	1
第2表	平成6年度下水道関係試掘・立会調査一覧表	4
第3表	瓜生堂遺跡第39次発掘調査出土遺物一覧表1	35

## 圖 版 目 次

図版第一	池島遺跡第13次調査	1.北壁断面上部 2.東壁断面上部 3.島畝状造構と足跡
図版第二	池島遺跡第13次調査	1.東壁断面中部 2.鞋跡 3.北壁断面下部
図版第三	池島遺跡第14次調査	1.東壁断面上部 2.東壁断面中部 3.東壁断面下部
図版第四	池島遺跡第14次調査	1.坪境溝 1 2.坪境溝 1 断面 3.井戸 1
図版第五	池島遺跡第14次調査	1.歛溝状造構 2.杭列 3.旧河道 1 内遺物出土状況
図版第六	池島遺跡第14次調査	1.旧河道 1 2.旧河道 3 3.調査地近景
図版第七	西ノ辻遺跡第37次調査	1.調査風景 2.ピット検出状況 3.ピット断面
図版第八	西ノ辻遺跡第37次調査	1.遺構検出状況 2.出土遺物
図版第九	瓜生堂遺跡第41次調査	1.東壁断面 2.東壁断面 3.東壁断面
図版第十	瓜生堂遺跡第41次調査	1.調査地近景 2.溝 6 3.土壤 1
図版第十一	瓜生堂遺跡第39次調査	出土遺物
図版第十二	瓜生堂遺跡第39次調査	出土遺物

図版第十三	瓜生堂遺跡第39次調査	出土遺物
図版第十四	瓜生堂遺跡第39次調査	出土遺物
図版第十五	若江遺跡第56次調査	1.A 地区東端断面 2.A 地区東端ピット
図版第十六	若江遺跡第56次調査	1.A 地区中世遺構 2.A 地区中世井戸
図版第十七	若江遺跡第56次調査	1.A 地区調査風景 2.A 地区弥生遺構
図版第十八	若江遺跡第59次調査	1.C 地区近世土壤 2.C 地区検出ザル
図版第十九	若江遺跡第56次調査	1.C 地区石製模造品出土断面 2.C 地区石製模造品及び供伴土器
図版第二十	若江遺跡第56次調査	鏡形石製模造品
図版第二十一	若江遺跡第56次調査	1.A 地区調査風景 2.B 地区作業風景
図版第二十二	若江遺跡第56次調査	1.D 地区東壁断面 2.D 地区東壁断面 3.D 地区暗渠
図版第二十三	若江遺跡第56次調査	1.D 地区井戸 2.D 地区溝 3.D 地区溝断面
図版第二十四	若江遺跡第56次調査	1.D 地区土壤 2.B 地区瓦・木積み遺構 3.B 地区溝 1
図版第二十五	若江遺跡第57次調査	1.土坑 1 検出状況及び遺物出土状況 (a) (上が北) 2.土坑 1 遺物出土状況 (b) (上が北) 3.土坑 1 完掘状況 (上が南)
図版第二十六	若江遺跡第58次調査	1.西壁土層断面 2.S K 1 検出状況 3.北側調査風景 (北から)

## 第1章 平成6年度の下水道関係調査について

遺跡内の下水道工事の円滑化と埋蔵文化財の調査・保存を図るため、東大阪市下水道管理者と東大阪市教育委員会および財團法人東大阪市文化財協会の間で平成2年10月に基本協定が締結された。その後平成5年度までに下水道関係事業として29件の発掘調査を実施し、あわせて多数の試掘・立会調査も行い、毎年その成果を『東大阪市下水道関係発掘調査概要報告』として刊行してきた。

平成6年度は第1表に掲載する5遺跡8件の発掘調査と、第2表に掲載する15遺跡26件の試掘・立会調査を実施した。各事業における成果の詳細は次章以下の概要報告に委ねるとして、ここでは総体的に6年度事業の傾向を記述することとする。前年度までと比較した6年度の凡そその傾向として、若江・瓜生堂遺跡が所在する中地区において発掘調査が集中的に実施されていること、池島遺跡が所在する東地区も漸次調査件数が増加しつつあること、試掘・立会調査件数が減少したこと、交通事情から夜間調査での厳しい条件下での調査が1件あったこと、以上4点があげられる。

中地区では新規事業として瓜生堂41次、若江56次、若江57次、若江58次、上小坂5次の都合5件の発掘調査を実施した。上小坂5次は推進工法による立坑部分の調査であったが、それ以外の4件はいずれも幅1m前後の掘削トレーニチでの調査となった。上小坂5次では交通事情のため夜間調査となった。なお、若江57次は次年度への継続事業となっている。

前年度に継続事業1件のみであった若江遺跡では3件の新規事業が実施された。これは同遺跡内の府道大阪東大阪線より南部において、精力的に公道における本管の埋設工事が行われていることによる。府道大阪東大阪線より北部では私道における枝管の埋設工事がピークをすぎ、

調査次数名	担当	面 積	調 査 期 間	備 考
池島 13次	三輪	35m <sup>2</sup>	H. 6.07.07～H. 6.08.04	2章に報告
池島 14次	井上	53m <sup>2</sup>	H. 7.02.13～H. 7.03.22	3章に報告
西ノ辻37次	金村	28m <sup>2</sup>	H. 6.06.08～H. 6.06.13	4章に報告
瓜生堂41次	井上	120m <sup>2</sup>	H. 6.05.16～H. 6.06.16	5章に報告
若江 56次	曾我・金村・井上	475m <sup>2</sup>	H. 6.04.21～H. 6.11.24	7章に報告
若江 57次	曾我	365m <sup>2</sup>	H. 6.12.16～継続中	8章に報告
若江 58次	曾我	22m <sup>2</sup>	H. 6.12.02～H. 6.12.08	9章に報告
上小坂 5次	松田・金村・井上	32m <sup>2</sup>	H. 6.12.08～H. 6.12.22	未掲載

第1表 平成6年度下水道関係発掘調査一覧表



- |           |           |          |
|-----------|-----------|----------|
| 1 中垣内遺跡   | 2 日下遺跡    | 3 芝ヶ丘遺跡  |
| 4 植附遺跡    | 5 神並遺跡    | 6 西ノ辻遺跡  |
| 7 鬼虎川遺跡   | 8 水走遺跡    | 9 鬼塚遺跡   |
| 10 山畠古墳群  | 11 上六万寺遺跡 | 12 繩手遺跡  |
| 13 五合田遺跡  | 14 北烏池遺跡  | 15 段上遺跡  |
| 16 下六万寺遺跡 | 17 船山遺跡   | 18 池島東遺跡 |
| 19 池島遺跡   | 20 玉串遺跡   | 21 山賀遺跡  |
| 22 小若江遺跡  | 23 上小阪遺跡  | 24 若江北遺跡 |
| 25 若江遺跡   | 26 巨摩廃寺遺跡 | 27 瓜生堂遺跡 |
| 28 岩田遺跡   | 29 西岩田遺跡  | 30 意岐部遺跡 |

第1図 遺跡分布図 (S=1/50,000)

試掘・立会件数は2件を数えるのみとなった。平成7年度には若江遺跡南部において5年度と同様な傾向が予想される。なお、私道における下水道工事に対しても遺跡範囲内のものは、試掘・立会調査で対応し地層観察と遺物採集を行っている。

東地区では池島13~14次、西ノ辻37次の3件の調査を実施した。西ノ辻37次以外は推進工法による立坑部分の調査であった。

基本協定締結後の過去4年間で東地区における発掘調査は9件にすぎず、6年度のこの地区での調査件数も同様に少ない。これまで中地区を中心に進められてきた公共下水道整備事業は漸次東地区へ移りつつあり、工事自体の件数は増加している。しかし、遺跡外であったり、試掘調査の結果、埋蔵文化財が確認されない地区である場合が多く、発掘調査に至らない例が多い。このことは試掘・立会調査の結果からうかがわれる。

発掘調査の有無は周辺での調査結果を参考に判断し、必要な場合は試掘調査を実施した。遺跡外であっても重要地点は試掘調査を行っている。6年度は15遺跡の26件の試掘・立会調査を実施した。現地表下2m以上の深さに埋もれている遺跡の場合は通常の試掘がよばず、様相を把握できていないものが多い。このため推進立坑の掘削に際して、できるだけ本調査をあるいは立会調査を実施して遺跡の資料収集に努めた。第2表に掲載した山畠古墳群などがそれにあたる。

公共下水道整備事業はおもに東大阪市下水道部によって行われているが、東大阪市土木公営所による場合もある。土木公営所による工事は緊急性を帯びた突発的な例が多い。当然のことながら下水道の整備されていない東地区で遺跡内の工事が行われ、6年度にも発掘調査を1件実施している。本書に掲載した日下14次がそれにあたる。下水道部との協定に含まれていないものであるが、下水道関係の事業であるため本書に参考資料として報告を行うものである。



第2図 夜間調査風景（上小阪5次）

遺跡名	調査地点	調査期間	担当	調査内容	備考
岩田遺跡	岩田町4丁目	H6.4.4	三輪	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
岩田遺跡	岩田町6丁目	H6.4.13	三輪	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
若江遺跡	若江北町3丁目	H6.5.24	金村	試掘・若江城の本丸にあたるため立会調査が必要と思われる。	
西ノ辻遺跡	西石切町3丁目	H6.5.28	金村	試掘・発生時代の墓域にあたるため発掘調査が必要と思われる。	西ノ辻37次調査
神並遺跡	東石切町1丁目	H6.6.10	金村	立会・遺構・遺物を検出せず。	
若江遺跡	若江北町3丁目	H6.8.1~8.3	曾我	立会・遺構・遺物を検出せず。	
鬼塚遺跡	宝町	H6.8.24	三輪	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
若江遺跡	若江南町3丁目	H6.9.26	井上	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
若江遺跡	若江北町3丁目	H6.10.4	三輪	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
馬場川・北屋敷遺跡	六万寺町2丁目	H6.10.6~12.12	上野	試掘・少景の土器が出土。立会調査が必要と思われる。	
若江遺跡	若江南町1・4丁目	H6.10.12	井上	試掘・遺物が出土。本開発が必要と思われる。	若江61次調査
山畠古墳群	上四条町	H6.11.14~11.15	井上	立会・遺構・遺物を検出せず。	
正興寺山古墳	額田町	H6.11.24	井上	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
西岩田遺跡	西岩田3丁目	H6.11.24~7.1.18	井上	立会・稟乱及び人孔部の砂崩より土器細片が出土。	
中垣内遺跡	善根寺町4・5丁目	H6.11.25~7.1.17	松田	立会・遺構・遺物を検出せず。地図記述を確認。	
鬼虎川遺跡	宝町	H6.12.14	井上	試掘・中・近世の包含層確認。立会調査が必要と思われる。	
若江遺跡	若江南町2丁目	H7.1.10	井上	立会・遺構・遺物を検出せず。	
神並遺跡	東山町・額田町	H7.1.11~1.12	金村	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
芝ヶ丘遺跡	中石切町4丁目	H7.1.13	井上	試掘・遺構・遺物を検出せず。	
若江遺跡	若江南町4丁目	H7.1.19	井上	試掘・布留期の河道にあたり、立会調査が必要と思われる。	
若江遺跡	若江本町4丁目	H7.1.29~2.2	井上	立会・中世の溝を検出。	
瓜生堂遺跡	瓜生堂2丁目	H7.2.6	井上	立会・遺構・遺物を検出せず。	
鬼虎川遺跡	宝町	H7.3.14	三輪	試掘・発掘調査が必要と思われる。	鬼虎川40次調査
岩田遺跡	岩田町5丁目	H7.3.17	三輪	立会・遺構・遺物を検出せず。	
鬼塚遺跡	南荘町	H7.3.18~3.21	井上	試掘・包含層を確認し、発掘調査が必要と思われる。	鬼塚20次調査
山畠古墳群	瓢箪山町	H7.3.19	井上	立会・遺構・遺物を検出せず。	

第2表 平成6年度下水道関係試掘・立会調査一覧表

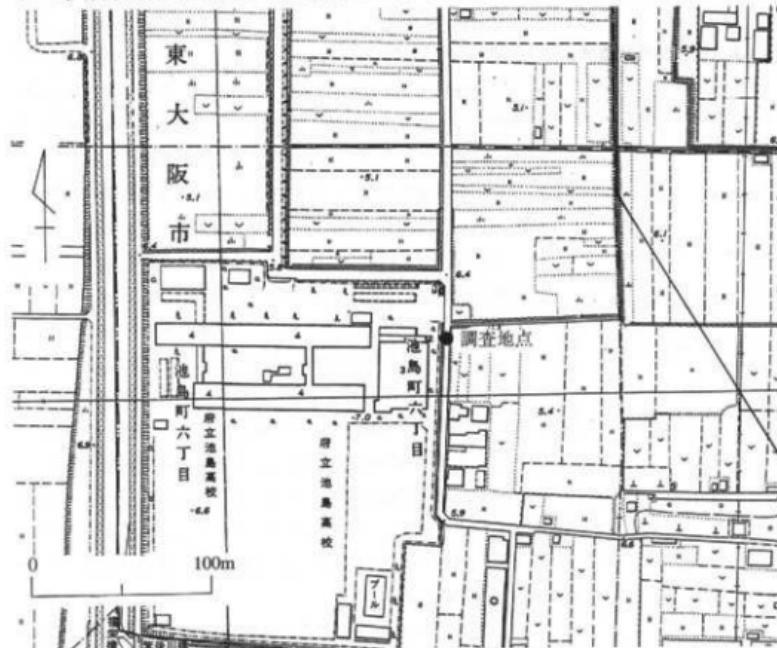
## 第2章 池島遺跡第13次調査報告

### 1 はじめに

池島遺跡は大阪府東大阪市の南西部、池島町5~7丁目、玉串町2・3丁目にまたがって所在する。生駒山地の西方は急な斜面となって渓谷を作り、小流が平野部へ流れて扇状地を形成している。扇状地の最末端が恩智川東岸あたりまでのび、西方は玉串川の旧河道、自然堤防がのびて高くなる。今回の調査地点は扇状地の末端に位置する。字名や坪の呼称などの水田地割が残る当地域も、現在は開発によりその景観は消え去りつつある。

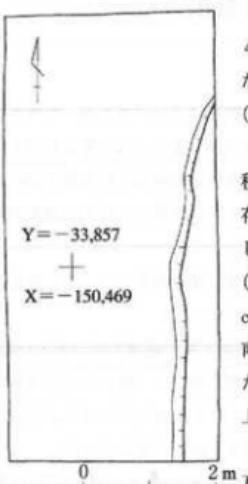
これまで大阪府教育委員会や大阪文化財センターなどの大規模な発掘調査によって、弥生時代の水田、古墳時代玉造工房、条里遺構など多くの成果が上げられている。

今回の調査は公共下水道築造工事第41工区に伴うもので、築造工事が推進工法であるため、調査は約7×5m (35m<sup>2</sup>) の発進坑について実施した(第3図)。調査地は府立池島高校に東隣する南北に走る道路上である。この地点は、旧地籍図に当てはめると字河26と23の坪境に位置している。標高は約6mを測る。調査期間は1994年7月7日~8月4日までおこなった。



第3図 調査地位置図 (S=1/2,500)

## 2 調査結果



第4図 烟鳥状遺構

掘削は現地表面から約1mの盛土を機械により除去し、以下4mを遺構・遺物の有無を確認しながら人力でおこなった。また、調査区の東辺と北辺にアゼを残し、地層断面を観察した(第6図)。

旧耕土は削平されているが、北壁断面の第1層～第3層の堆積は、鳥煙として土を盛った様相を呈し、東西にのびる鳥煙の存在が考えられる。第7層～第10層は南北にのびる鳥煙を形成していて、調査区の東辺で鳥煙状の高まりの一部を検出した(第4図)。高まりは約50cmである。また、北壁断面で幅20～35cm、高さ20cmの畦畔と思われる高まりを確認した。この畦畔が南北に通っていた可能性がある。その周辺は足跡など動き回った痕跡があり、鳥煙のとなりで水田を作っていたと考えられる。上面で地震の痕跡を確認している。

第13層は、細繙を含む灰色砂質土で、水田耕土と考えられる。瓦質擂鉢片、瓦質羽釜片、瓦器片、土師器片等が出土している。

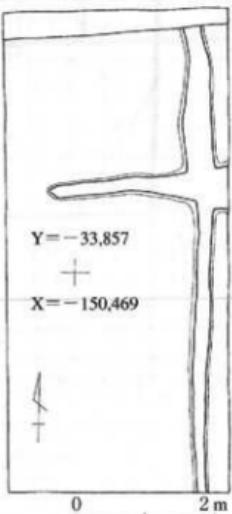
第14層上面で条里水田の一部を検出した(第5図)。水田耕土は灰色粘土に極粗粒砂が混じる。場所によっては灰色粘土と中粒砂の互層がみられる。南北に伸びる畦は調査区の東辺に位置し、また、南東から北西に向かってやや傾斜している。

第16層は東壁断面で、畦畔状の高まりを確認し、水田耕土と考えられる。オリーブ灰色粘土に中～粗粒砂が混じる。

第17層～第22層は古墳時代に相当すると考えられるが、無遺物層で明確なことは不明である。

第23層は暗緑灰色シルト+粘土に細繙を含む。水田耕土と考えられるが、畦畔等は検出できなかった。弥生時代後期に相当する層である。第24層は河道の堆積層である。調査区の南東から北西に向かって流れていると推測できる。何回かの流れによって、下層の第25層の黒色粘土、第26層の緑灰色粘土は削られている。北西に向かうにつれて、より削平されていて、河道が次第に西へ移っていったことがうかがえる。第27層の緑黒色粘土、第28層の暗緑灰色粘土には地震による乱れが確認でき、層界が不明瞭である。

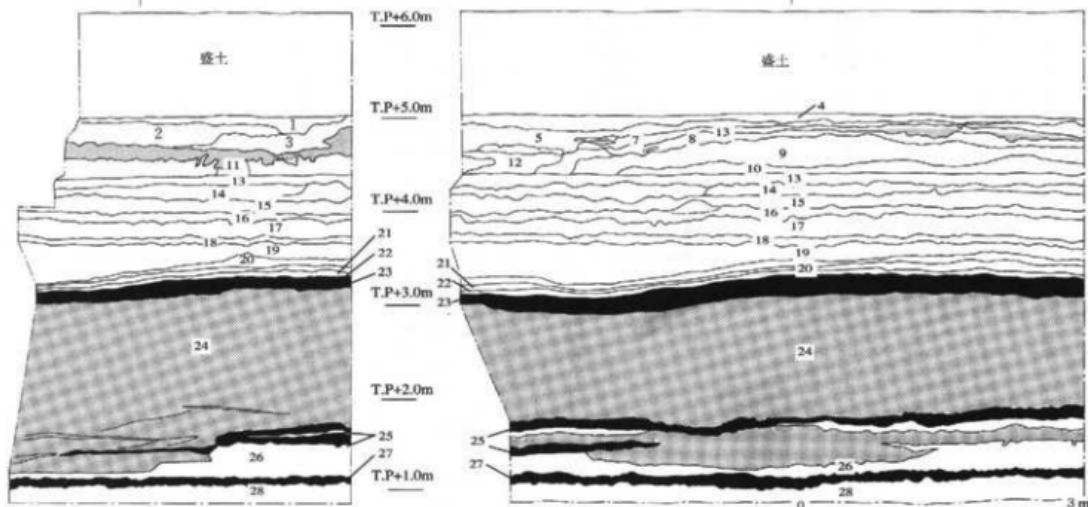
遺物は、調査区が狭小なこと、当地が水田として利用されてきたこと、といった理由からほとんど出土が見られなかった。



第5図 畦畔

Y=-33,857

X=150,469



第1層5GY4/1暗緑灰色砂質土  
 第2層10GY4/1暗緑灰色粘質砂質土  
 第3層10GY4/1暗緑灰色粘質砂質土 鉄分沈着  
 第4層10GY6/1暗緑灰色粘質砂質土  
 第5層10GY5/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂  
 第6層5GY4/1暗緑灰色粘質砂質土 鉄分沈着  
 第7層2.5GY4/1暗緑灰色粘質砂質土 鉄分沈着  
 第8層5GY3/1暗緑灰色粘質砂質土 鉄分沈着  
 第9層7.5GY3/1暗緑灰色粘質砂質土  
 第10層2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質砂質土

第11層7.5GY3/1暗緑灰色粘土 木田畦畔  
 第12層7.5GY4/1暗緑灰色粘土  
 第13層5Y4/1灰色硬い砂質土  
 第14層7.5Y4/1灰色粘土と織～中粒砂の互層 水田面  
 第15層10Y4/1灰色粘土 部分的に中粒砂混じる  
 第16層2.5Y4/1灰黃色シルト+粘土 細粒砂混じる 水田面  
 第17層5GY4/1暗オリーブ灰色シルト+粘土  
 第18層10YR4/1褐色粘土上  
 第19層10YR5/1褐色粘土  
 第20層2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト+粘土

第21層5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 シルト～細粒砂混じる  
 第22層2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト+粘土  
 第23層7.5GY4/1暗緑灰色シルト+粘土 細粒砂混じる 水田面  
 第24層7.5Y4/1灰色細粒砂～織  
 第25層5Y2/1黒色～2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 細粒砂混じる  
 第26層10G2/1緑灰色粘土  
 第27層10G2/1緑灰色粘土  
 第28層7.5GY4/1暗緑灰色粘土

第6図 池島遺跡第13次発掘調査土層断面図

1は瓦質擂鉢で、口縁部外面を下方に拡張し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は、口縁部直下を残し、横方向のヘラケズリをおこなったのち、ややナデている。内面はハケ調整をおこなったのちナデしているが、部分的に消されず残る。口径は32cmを測り、色調は灰白色を呈す。2は丸瓦である。円筒の型に布をかぶせたのち、粘土を貼り付けて二分したものであろう。面取りをおこない調整している。3は瓦質擂鉢で、1と比べて、口縁部外面の丸みをもたず、下方の拡張も少ない。口縁端部は丸みのある面をもつ。体部外面は、口縁部直下を残し、横方向のヘラケズリをおこなっている。内面は横方向のハケ調整をおこなったのちナデしている。口径は29cmを測り、色調は黒灰色を呈す。4は瓦質羽釜で、鍔の一部のみが残存している。破片のため、径や詳細は不明であるが、内傾気味にのびる口縁部と推測する。口縁部と鍔の境には稜をもち、鍔はほぼ水平にのびる。色調は灰白色を呈するが、体部外面は鍔の直下から煤が付着している。これらの遺物は14世紀後半～15世紀前半に属する。



第7図 出土遺物実測図

### 3まとめ

弥生時代の小区画水田は、大阪文化財センター等の調査で確認されていたが、当地点でも、弥生時代後期から水田耕作をおこなっていたといえる。その後の生活の痕跡は、条里制水田の時期までみられなかった。平面および断面で確認できた条里制期の水田面は3面あるが、14世紀～15世紀にかけてのものと考えられる。また、鳥畠については、15世紀前半の南北方向のものと、それより若干時期の新しい東西方向のものが存在したと考えられる。

当初、坪境に関する遺構の存在を想定していたが、今回の調査では明らかにできなかった。南北方向にのびる鳥畠や条里制水田の南北にのびる畦畔が、調査区の東辺で検出されたことは、何らかの区画を示すものかもしれない。

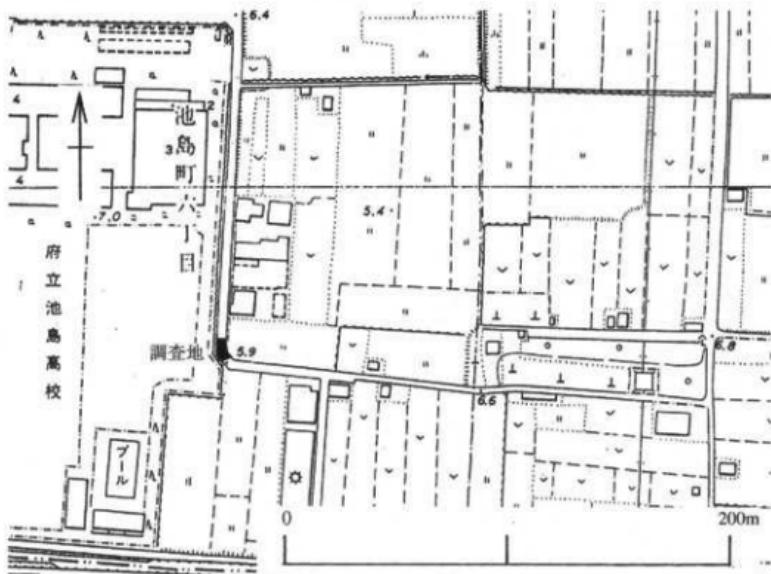
## 第3章 池島遺跡第14次調査概要

### 1 はじめに

池島遺跡は東大阪市池島町5～7丁目、玉串町東2・3丁目から、八尾市福万寺町北、福万寺町に広がって福万寺遺跡と連続すると考えられる、縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。従前の調査で弥生時代中期以降の水田跡・集落跡、古墳時代の滑石製品製作跡・集落跡、律令期以降の条里遺構と耕作地跡、近世に特産物の河内木綿を栽培した搔き上げ田と呼ばれる耕作地跡などが検出されている。

本調査は平成6年度公共下水道管渠築造工事に伴い、前章の池島遺跡第13次調査地へ下水管を推進するため、<sup>(1)</sup>その南方約108mの地点の発進立坑について実施した。調査地は、現行の行政区分では池島町6丁目、条里地割りでは字河坪23～26を画する交差点にあたる。面積は約53m<sup>2</sup>、上部1.5mは重機による掘削を行ない、それ以下については、人力掘削によって遺構の検出・遺物の採集・断面観察などの調査を行なった。調査は平成7年2月13日～3月22日まで実施した。

なお出土遺物の整理作業は現在継続して進めているところで、ここでは現場調査で得られた概要を報告するにとどめ、詳細は後日に譲りたい。



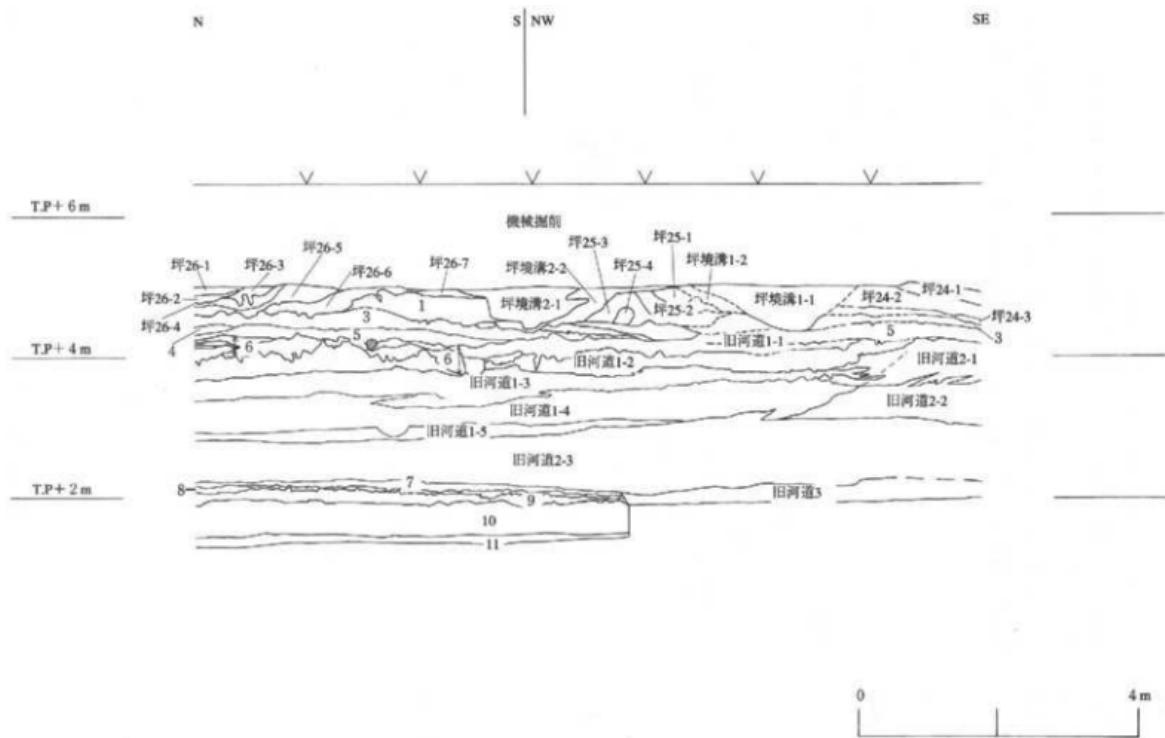
第8図 調査地位置図 (1/2,500)

## 2 層位

第9図に示した地層断面上部には、字河坪24~26の耕作土層が認められ、各坪間の層を対応させることは困難であるため坪毎に土質・土色を記した。遺構・旧河道内も別途土質・土色を記し、それら以外の地層を第1~11層に細分した。

耕土層と考えられる地層が坪24ではほぼ水平に堆積しているが、坪25では坪境溝1と2の交点へ向かって、坪26では坪境溝2の方へ向かって北から南に耕土を搔き上げている。第1層は坪26では約35cm掘り下げられて水田面を造成しており、坪25では掘り残された畦畔部分だけに認められた。第6層はラミナ層が観察できるため古墳時代中期~後期頃の河道の氾濫による堆積層と思われ、下面の耕作関連遺構を覆っていた。周辺の調査成果から推測すると第8層は弥生時代前期、第11層は縄文時代晚期の堆積層になるものと思われる。

- 第1層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 シルト~極細粒砂のラミナが混じり、西側の方ほどその量が多い  
第2層 2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂~中粒砂 上部は細粒以下のラミナ混じる  
第3層 7.5GY5/1緑灰色~2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土 北側と上部はシルト  
第4層 10Y3/1灰色シルト~細粒砂 極粗粒砂以下微量混じる  
第5層 7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂シルト 北側は極細粒砂 細粒砂~粗粒砂・極粗粒砂のラミナ混じる  
第6層 5Y4/1灰色~5GY4/1暗オリーブ灰色シルト~細粒砂 細粒砂~粗粒砂・極粗粒砂のラミナ混じる  
第7層 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土 濃化した植物遺体の薄層混在  
第8層 5Y3/1オリーブ黒色粗粒砂・極粗粒砂混じり粘土  
第9層 10GY4/1暗緑灰色粘土 ブロック状で2.5Y3/1黒褐色に変色 細粒・シルト~極細粒砂微量混じる  
第10層 上部は7.5Y5/1灰色中粒砂~5cm以下の中疊 下部は5Y5/1灰色中粒砂~極粗粒砂  
第11層 上部は5Y3/1オリーブ黒色 下部は2.5Y3/1黒色粘土  
坪24~1層 上部は10Y4/3/4にぶい青褐色中粒砂~20mm以下の中疊 下部は2.5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂~粗粒砂と粗粒砂~極粗粒砂のラミナ  
-2層 10Y4/2灰青褐色粘土混じり細粒砂~中疊の砂質土  
-3層 5Y3/1灰色粗粒砂~中疊  
坪25~1層 2.5Y5/3黄褐色中粒砂~4cm以下の中疊  
-2層 5GY3/1オリーブ灰色細粒砂~中粒砂混じり粘土  
-3層 2.5Y5/2暗灰褐色中粒砂~中疊  
-4層 5GY3/1オリーブ灰色細粒砂~粗粒砂 中疊混じる  
坪26~1層 7.5YR4/6褐色中粒砂~中疊  
-2層 7.5YS/1灰褐色細粒砂~細粒砂 極粗粒砂以下のラミナ混じる  
-3層 10YR5/6黄褐色中粒砂~極粗粒砂  
-4層 7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂~中疊混じり粘土  
-5層 7.5YS/1灰褐色細粒砂~中疊混じり粘土 下層との層境に細粒砂以下のラミナ残る  
-6層 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂~中疊混じり粘土 下層との層境に極粗粒砂以下のラミナ残る  
-7層 7.5GY4/1暗緑灰色シルト・細粒砂~極粗粒砂  
坪境溝1~1層 7.5Y4/1灰色細粒砂~細粒砂混じり粘土 中疊以下のラミナ混じる  
-2層 2.5YS/3黄褐色細粒砂~中疊 中疊以下のラミナ混じる  
坪境溝2~1層 7.5YS/1灰色~2.5YS/4黄褐色中粒砂~1cm以下の中疊  
-2層 2.5GY3/1オリーブ灰色細粒砂~中粒砂 中疊以下微量混じる  
旧河道1~1層 2.5Y2/1黑色粘土 南側の上部は砂粒が混じる  
-2層 2.5Y2/1黑色粘土と2.5Y5/1黄褐色細粒砂~極粗粒砂の漸移帶 岩化物・植物遺体混じる  
-3層 10Y3/1黒褐色~7.5Y4/1灰色粗粒砂~中疊 シルト~細粒砂・中粒砂~中疊のラミナ、植物遺体混じる  
-4層 5Y4/1灰色シルト~極細粒砂 南側では細粒砂~粗粒砂のラミナと植物遺体混じる  
-5層 7.5Y6/1灰色中粒砂~極粗粒砂 中疊以下少量混じる  
旧河道2~1層 10GY4/1暗緑灰色細粒砂~細粒砂 中粒砂~粗粒砂とシルト~極細粒砂のラミナ混じる  
-2層 7.5YS/1灰色細粒砂~粗粒砂  
-3層 5YS/1灰色中粒砂~中疊  
旧河道3 7.5YS/1~5YS/1灰色中粒砂~細粒砂 粗粒砂~25mm以下の中疊 植物遺体・シルト小塊混じる



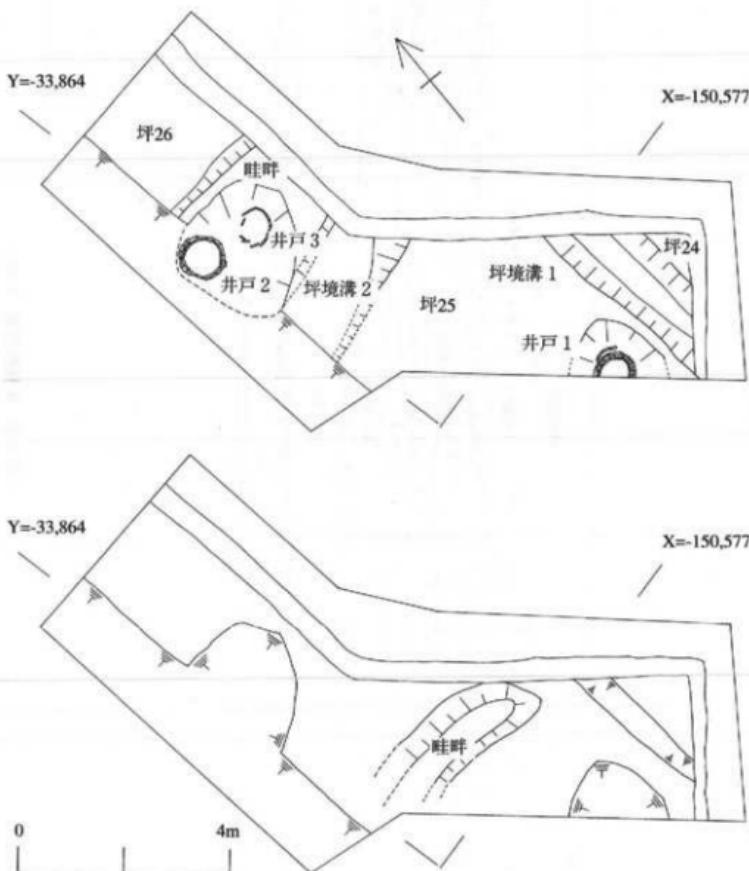
第9図 東壁断面図 (1/80)

### 3 遺構

近世の遺構では坪境溝2条、井戸3基、畦畔、足跡を確認した。

坪境溝1は幅110cm、深さ52cmで南北方向に延び、字河坪24と25を画して調査地外へ至る。現在の坪境より約6m北方へ延びる。

坪境溝2は現代の坪境溝による搅乱と湧水による井戸堀方の崩落のため、平面で全容を把握できなかった。断面と一部検出しえた平面から推測すると幅160cm、深さ66cmで東西方向に延



第10図 遺構平面図1 (1/100)

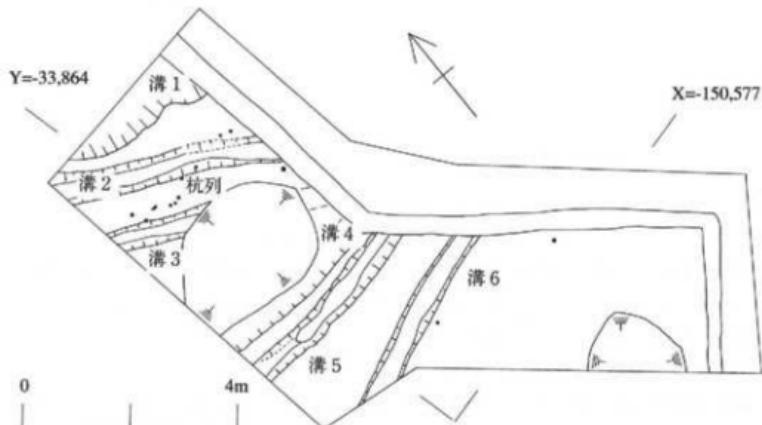
び、字河坪25と26を画し、東側の調査地外で坪境溝1と交差するものと思われる。現在の坪境道路より約6m北方に位置する。

井戸1は坪25で検出されたが、凡そ半分は西側の調査地外へ広がる。この井戸は4段の桶側からなり、1段目は長さ83cmの板材5枚を確認しただけで、2段目の桶は直径70cm程度になると思われる。深さは約280cmで、底部は古墳時代前期の旧河道に達する。

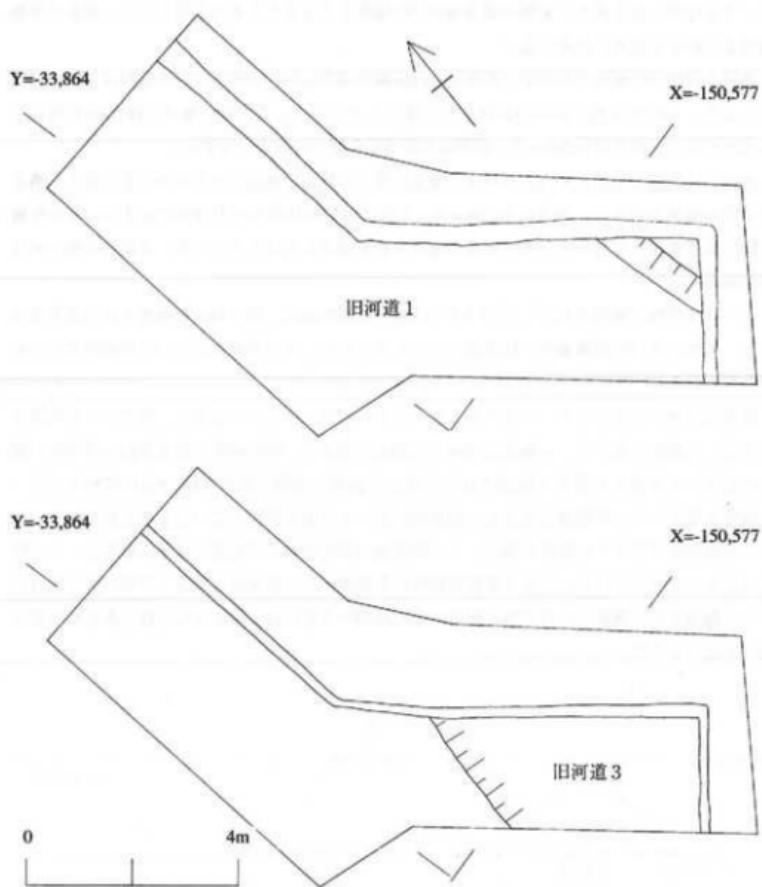
井戸2は坪26で検出された。井戸3の廃棄に伴って新たに掘削されたものと思われる。構造は3段の桶側からなり、深さは約250cmで、底部は古墳時代前期の旧河道に達する。井戸枠最上段は原形を保っておらず、長さ96cmの板材8枚を確認したにとどまった。2段目の桶の直径は約70cm。

井戸3は坪26で検出された。T.P.3.7~3.8mで直径約60cm、深さ94cmの桶側1段のみを確認した。上部の井戸枠は廃棄時に抜き取られたと考えられ、その後新たに井戸2が掘削されたものと思われる。

畦畔は坪26で検出された。当初は第1層上面から約35cm掘り込んでおり、幅2mで坪境溝2と平行して東西に延びる。本調査地の西方約20mの地点で、昭和47年に府立池島高等学校の建設に先立って実施した調査で確認された<sup>(2)</sup>、坪25と26境の水路の北側で幅2.8mの畦畔と、同一の遺構と考えられ、坪境溝2とともに条里制に沿って水田を区画していたものと思われる。ただし本調査地で検出した畦畔の場合、その後坪26の耕土層および氾濫による堆積層を、この畦畔に向かって搔き上げている様子が断面観察から確認でき、後世には搔き上げ田の畑作部分にあたる島畑として機能した可能性が残る。また坪24~4層には上層からの足跡と思われる踏み込みが認められた。



第11図 遺構平面図2 (1/100)



第12図 遺構平面図3 (1/100)

中世の遺構では畦畔を1条検出した。第1層を削り出して上部幅約55cm、下部幅約116cm、高さ16cmで東西に延びるが、上層で検出した坪境溝2南肩より約70cm南に位置するため、この畦畔が坪境を示すのかどうかは判然としない。

古墳時代中期以降の遺構では溝・杭列を検出した。

溝は古墳時代前期の旧河道上面で検出した。幅40~60cm、深さ14~25cmで溝1と2、溝3~5がほぼ平行して北西から南東方向に延びる。池島・福万寺遺跡では数条が平行して延びる溝群が大阪文化財センターの調査でも確認されており、「畝溝状遺構」と仮称されている。<sup>(3)</sup>本調

査地では遺構掘削後に栽培作物の根跡と思われる直径数cmの凹みが認められたこと、以下に述べる杭列が伴っていたことから畑作の歴史に伴う溝と考えられる。

杭列は歴史と同一面から打ち込まれていたと思われるが、杭の多くは上部が欠損しており、本来の遺構面を少し掘り下げた段階で検出した。杭の直径は5~7cm。杭は溝と平行しているものも存在することから、これらの杭は耕作に伴うものと考えられる。

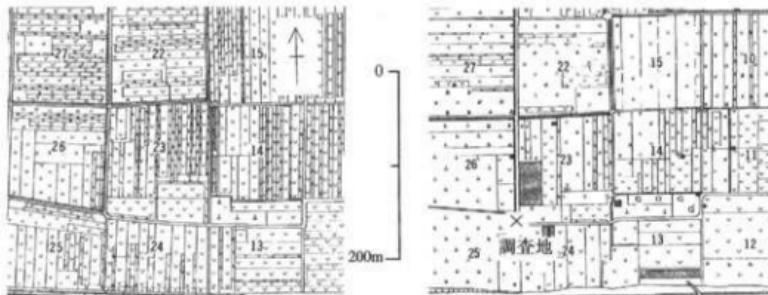
旧河道1は南北方向に延び、東肩のみを検出した。深さ145cmで旧河道内の堆積は、下部中疊以下の砂礫、上部が黒色粘土でその中位に漸移帶が認められることから、この河道は最終的には静水状態で古墳時代前期に埋没したものと考えられ、古式土器が大量に出土した。

旧河道2は肩を検出できなかったので詳しい方向は不明であるが、旧河道1と同様にはば南北に流れていたと思われる。層厚は約200cm。時期は弥生時代中期~後期頃に属するものと思われる。

旧河道3は第7層上面で南西~北東に延びる北肩のみを検出した。時期は弥生時代中期頃に属するものと思われる。

#### 4 坪境の移動について

前章で坪23~26を区切る道路が明治初年頃には西北西から東南東に傾ながら延びていたのが、昭和47年頃には西端の坪23~26の坪境が南下し、道路はほぼ東西方向へと変化している。このことから本調査で検出した近世の坪境は、少なくとも明治初年頃までは基本的に踏襲されていたと考えられる。その後、昭和47年頃までのおよそ100年の間に生じた坪境の移動理由については、現在坪14の南端に存在する高圧線の鉄塔の建設、あるいは周辺の小規模な工場建設と道路整備など、農地への近代化的波及の結果による移動と想定できるが、判然としない。



第13図 調査地周辺図

## 5 まとめにかえて

今回の調査で、本調査地点が弥生時代前期頃～古墳時代前期まで旧河道内にあたることが明かとなった。また静水状態下の旧河道内堆積層からの大量の古式土師器の出土は、上流からの流れ込みではなく、周辺に当該期の集落が存在したことを想定させる。上記の旧河道が埋没した古墳時代中期～後期頃には、旧河道上面で溝を掘削して畠を作り、杭列を施すなどの耕地開発が行なわれ、畑地として利用されたものと考えられる。

その後近世に至るまでの遺構はほとんど確認できず、中世頃の畦畔を1条検出したにとどまった。この畦畔も条里制に則ったものであるのか、耕作に伴うものであるのかは判然としない。

近世には、本調査地点が条里制下の坪境にあたり、各坪は溝によって区画されており、その坪境は少なくとも明治初年頃までは踏襲されていたこと、各坪内は耕作地として利用されていたことが明かとなった。調査面積は決して広くはなかったが、灌漑用の井戸が3基検出されたのも、調査地が坪境に位置するためであろう。

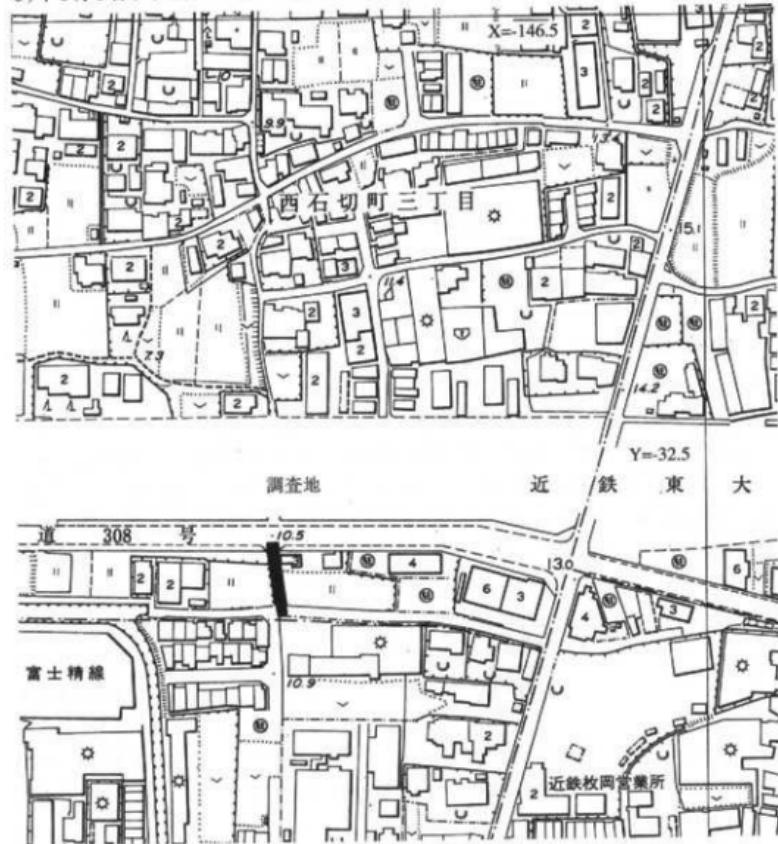
## 注

- (1) 「池島遺跡第13次調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1994年度—』  
東大阪市文化財協会 1996
- (2) 『池島町の条里遺構—調査概報—』東大阪市遺跡保護調査会 1973
- (3) 『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要 II —90-3・6 調査区（1990年度）の調査略報—』  
(財) 大阪文化財センター 1991
- (4) 前掲注 (2) より引用

## 第4章 西ノ辻遺跡第37次調査報告

### 1 はじめに

今回の調査は公共下水道管渠築造工事に伴うもので、総延長約30m、幅約1mの開削工事について実施したものである。調査地は東大阪市西石切町3丁目地内の市道上で、付近では近畿日本鉄道東大阪線建設に伴う調査等が行われている(第14図)。現場調査は中断を含め1994(平成6)年6月8日から13日まで行い、調査面積は約28m<sup>2</sup>である。



第14図 西ノ辻遺跡第37次調査地位置図 (S=1/2,500)

調査地の北に方形周溝墓が<sup>(1)</sup>、東にピットが<sup>(2)</sup>確認されており、今回の調査によってその境界が明らかとなるものと期待された。

現道路上であるため調査単位を長さ約5mとし、終了区間を埋め戻す仮復旧を行い、全区間の調査終了後、本管の埋設を行う方法をとった。地山上面までの掘削には重機を用い、遺構の検出、掘削のみ人力で行った。なお検出した遺構面(地山)以深の調査は実施していない。

なお実測の基準には国土座標第VI系を用い、測量作業は三和航測株式会社に委託した。

## 2 調査概要

### 1)層序

調査区内の層序は以下のとおりであった(第16図)。

第1層 表土(アスファルト)、盛土、旧耕土及び旧床土層。

第2層 黒褐色中粒砂混粘質シルト層。

土師器もしくは弥生土器の細片や弥生土器が出土した(第15図)。中世以降の耕作土層と想像される。

第3層 黄褐色から褐色細砂～砂礫混粘質シルト層。

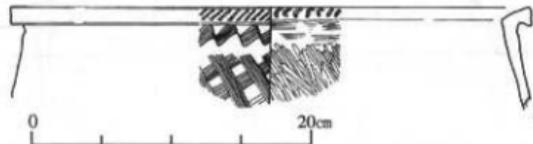
弥生時代以前の堆積層。いわゆる地山である。遺構は本層上面でのみ検出した。南部では粘質シルト層となり乾痕が観察された。

### 2)遺構と遺物

検出した遺構は土壤1基を除いて、すべてピットであった(第16図)。ピットは最大のもので径約30cm、深さ約40cmを測り、柱痕跡を確認できるものがあることから、柱穴と考えられる。

5基のピットから遺物が出土したが、図示できるものはS P01から出土した鉢のみである(第15図1)。口径約37.4cmと推定されるが小片であるため疑問が残る。口縁頂部に小さな扇状文、口縁外面に列点文を施す。体部内面はみがき調整である。体部外面には斜格子を頸部外面には波状文を施す。S P01からは他に外面にはけめを残す壺(図版第8-2)がと壺の細片(図版

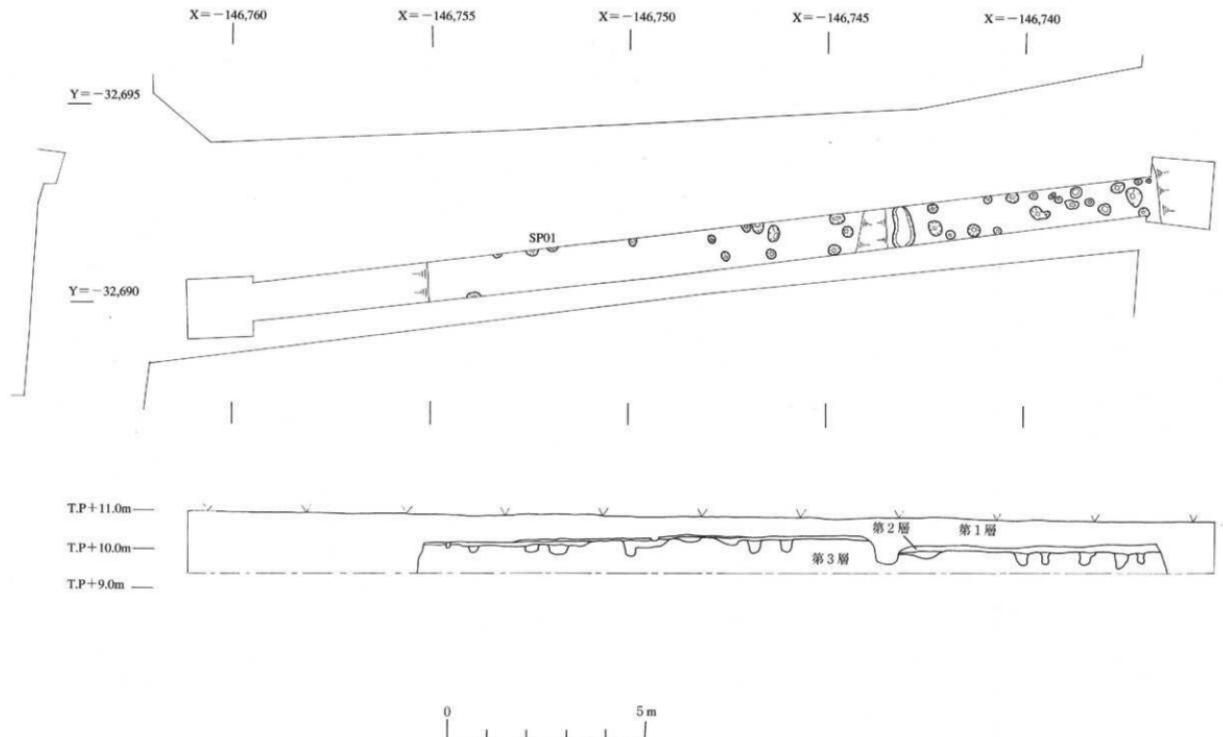
第8-3)が出土し



第15図 西ノ辻遺跡第37次調査S P01出土遺物 (S=1/4)  
基からは微細な弥生土器細片が出土している。

ている。いずれも角閃石を含み、焼成は堅い。明るい茶褐色を呈し、いわゆる生駒西麓産と呼ばれるものである。他の4

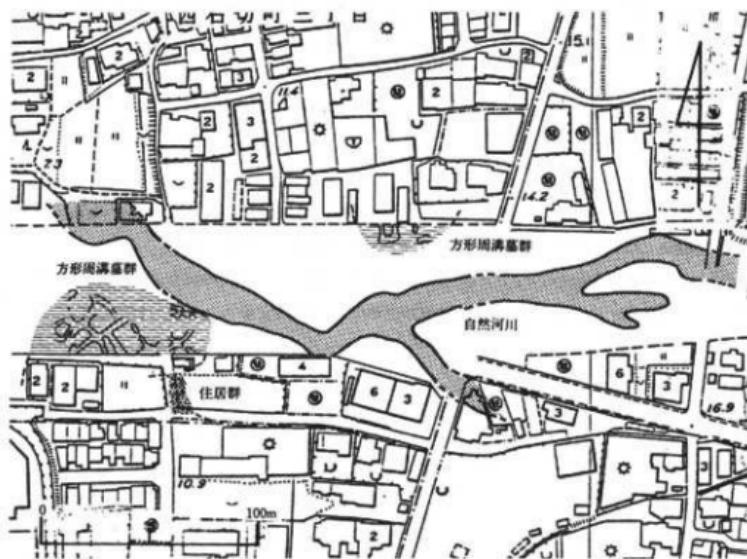
ピット群の埋土は黒褐色中粒砂混粘質シルトと黄灰色シルトブロックを含むものとに大別さ



第16図 西ノ辻道路第37次調査平面図・断面図 (S=1/100)

れるが、建物に復原できるものはなかった。

弥生土器が確認されたピットと埋土の違いは関係なく、検出されたピットはほとんどが弥生時代中期のものと推測される。



注

- (1) 東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会「西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡－西ノ辻遺跡第6次、第7次、第8次調査 鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書－」1988
- (2) 財団法人東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第24次発掘調査概報』「(財)東大阪市文化財協会概報集」1989
- (3) 注(2)より転載
- (4) 注(2)に同じ
- (5) 横浜市埋蔵文化財調査委員会「歳勝土遺跡　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　V」1975  
横浜市埋蔵文化財センター「大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅰ　遺構編－　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　XⅡ」1991  
財団法人　横浜市ふるさと歴史財團「大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ　遺物編－　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　XV」1994

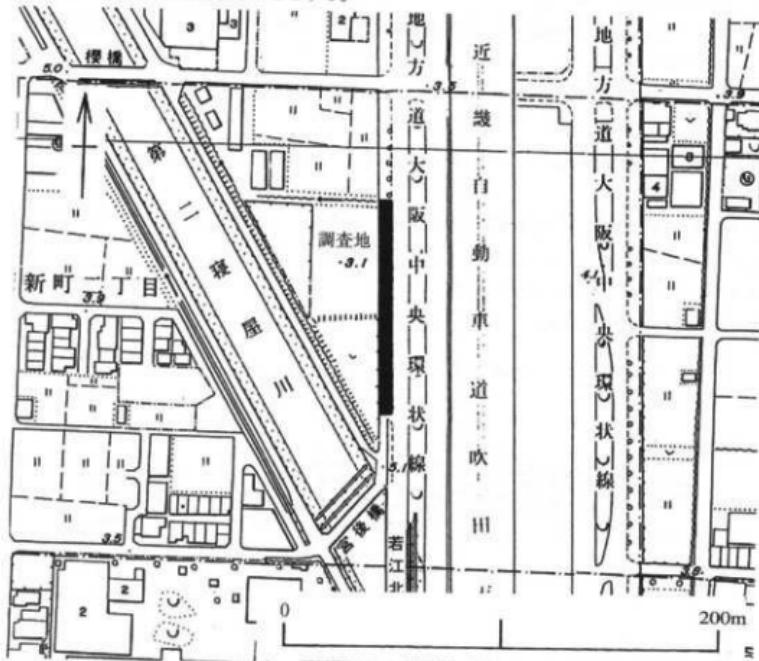
## 第5章 瓜生堂遺跡第41次調査概要

### 1 はじめに

瓜生堂遺跡は東大阪市瓜生堂1・2丁目、若江西新町1・2丁目一帯に広がる弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡である。本遺跡は昭和40年に、府道大阪中央環状線敷設に先立つ工業用水管理工事に伴って発掘調査を実施して以後、これまでに弥生時代の住居址・方形周溝墓、古墳時代の住居址・平安時代の井戸、中世の耕作跡などが確認されている。

本調査地は瓜生堂遺跡の南端にあたり、平成6年度公共下水道管渠整備工事に伴い、大阪の大動脈にあたる府道大阪中央環状線の歩道に下水管を布設するため、若江西新町1・2丁目地内で幅約1.2m、延長100m、面積120m<sup>2</sup>について調査を実施した。現場調査は平成6年5月12日～6月16日迄行なった。

整理作業は現在も継続中である。このため詳細は後日に譲ることとし、ここでは現場調査で明かとなった概要を報告することとする。



第18図 調査地位置図 (1/2,500)

## 2 層位

調査地の標高はT.P.約4mで、地表下約1.1mまでは府道大阪中央環状線敷設に伴う盛土であった。

その下層では水田耕作土層と思われる第2層を調査地の南半で確認した。調査地北半に広がる第3層を掘り下げており、層厚約50cmで4層に細分でき、上部2層は江戸時代以降、下部2層は室町時代頃と思われる。対して調査地北半の第3層上面は、乾痕が認められ畑作地として利用されていたと考えられるが、上部を府道中央環状線建設時に削平されており、畠・畦畔等は検出されなかった。第3層からは古墳時代中期以降の遺物が出土している。

地表下1.6m以下の第5層の砂礫層は、(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道関連および府道中央環状線立体交差事業の調査で検出された<sup>(2)</sup>、古墳時代前期の旧河道内あるいはその氾濫による堆積層と思われる。

第1層 盛土

第2 a層 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混じり粘土。細礫以下を多量含む。5GY4/1暗オリーブ灰色のブロック混じる。

第2 b層 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混じり粘土。細礫以下を多量含む。2.5Y3/1黒褐色のブロック混じる。

第2 c層 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混じり粘土。細礫以下を多量含む。鉄分斑点状に沈着。

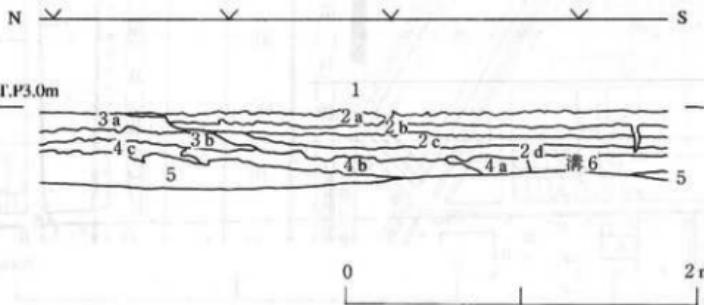
第2 d層 2.5Y3/2黒褐色極細粒砂～細粒砂混じり粘土。細礫以下を多量含む。鉄分斑点状に沈着。

第3 a層 2.5Y5/2暗灰黄色～10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト～細粒砂。鉄分斑点状に沈着。

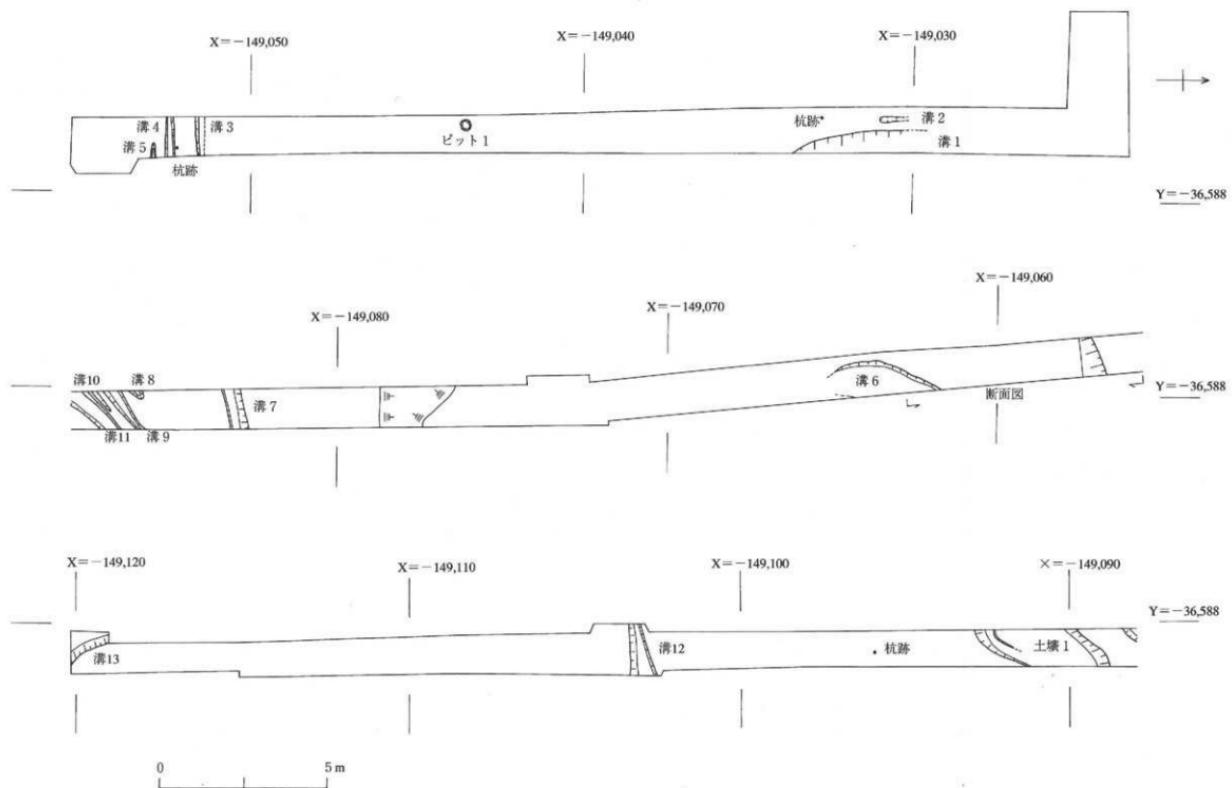
第3 b層 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト～極細粒砂。鉄分斑点状に沈着。

第4 a層 10YR4/1褐灰色中粒砂～中礫。

第4 b層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土ブロック混じり極細粒砂。



第19図 東壁断面図 (1/60)



第20図 連構平面図 (1/120)

第4 c層 2.5Y4/1黄灰色シルトブロック混じり細粒砂。

第5層 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細粒砂。層厚約30cmの粘土層狭在。

溝6 2.5Y4/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混じりシルト。

### 3 遺構

溝1は幅50cm以上、深さは約15cmで、埋土は2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂が微量混じったシルト～粘土。耕作に伴う灌溉用の溝と考えられる。溝1の西側で幅20cmの鍛溝と思われる溝2および杭跡を検出した。これらの遺構は第3 a層上面で確認し、江戸時代に属すると思われる。

ピット1は第2 a層上面で検出され、直径34cm、深さ6cm。比較的浅い掘削のため、柱穴とは考え難い。

平行して東西に延びる溝4・5は第3 b層下面で検出され、幅22・15cm、深さ5・3cmと浅く、鍛溝と考えられる。また溝4の北肩で直径4cmの杭跡を確認している。この2条の溝と平行する溝3は、深さ26cmで第3 b層から掘り込まれており、性格を異にするものと思われる。

X=-149.055付近で、水田面を形成する落ちを検出した。しかし水田を細かく区画するような畦畔等は検出されなかった。水田内の耕土層は4層に細分でき、中世から近世以降まで使用されたと考えられる。

溝6は北北東から南南西に延び、第2 d層下面で検出された。南肩は不明瞭であったが、断面観察から幅100cm、深さ20cmに復元できる。

溝7はほぼ東西に延び、第5層上面で検出された。幅130cm、深さ24cm。

溝8～11は平行して北東から南東に延び、第5層上面で検出された。幅10～60cm、深さ3～9cmと浅く、中世の鍛溝と思われる。また溝11の南側では水田造成時の痕跡として、第5層上面で約6cmの段差が認められた。

土壤1は第5層上面で検出された。平面形は曲線を描きながら北東から南西に延び、幅230cm、深さ32cm。

溝12は東西に延び、第5層上面で検出された。西側の幅は52cmであるが、東側では100cmに広がっている。深さ20cm。

溝13は調査地南端の第5層上面で検出された。東肩は円弧を描きながら南東から北北西に延びる。幅86cm以上、深さ15cm。

### 4 まとめにかえて

今回の調査はもっとも深い地点で、地表下2.3mまで掘削を行なったが、瓜生堂遺跡を著名なものとしている弥生時代の包含層・遺構面には達しえなかった。しかし中世から近世の耕作関連遺構などを検出した。また遺物では、近年発見が相次いでいる平野部における小型低方墳に伴うと思われる円筒埴輪も出土している。今後出土遺物の整理作業が終了した時点で、あらた

めて報告を行ないたいと思う。

注

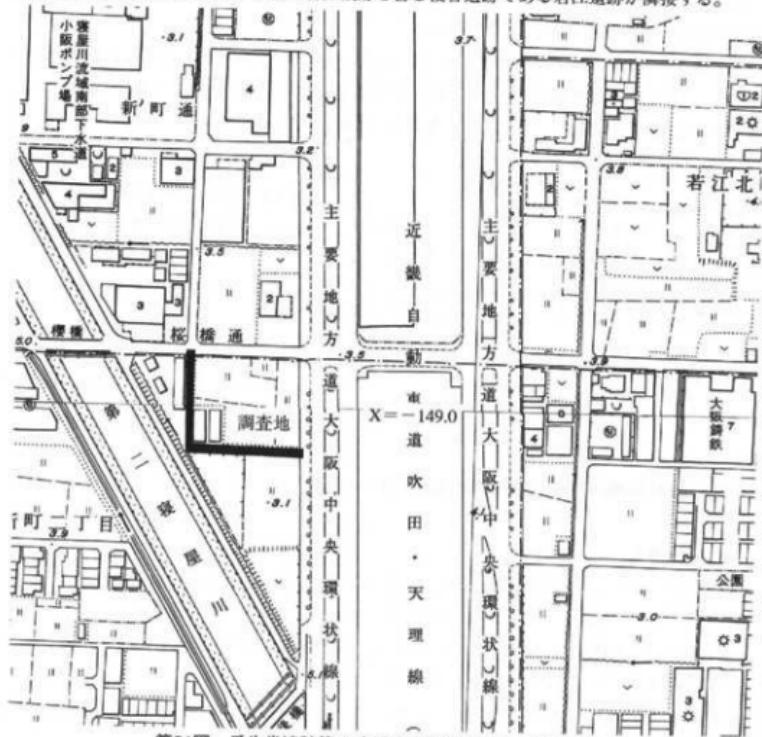
- (1)『瓜生堂—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書一』  
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980など
- (2)『巨摩・若江北遺跡発掘調査概要報告—第4次—』(財)大阪文化財センター 1995
- (3)『巨摩・若江北—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書一』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1975  
『長原遺跡発掘調査(資料編)』 長原遺跡調査会 1976  
『長原—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書一』  
(財)大阪文化財センター 1978 など

## 第6章 瓜生堂遺跡第39次調査報告（その2 遺物編）

### 1 はじめに

本調査は1991(平成3)年度に実施したものであり、遺構については概要を報告済みである。<sup>3)</sup>ここでは未報告であった遺物について述べることとしたい。

瓜生堂遺跡は河内平野中央部に位置し、弥生時代から連続とつづく複合遺跡で、特に弥生時代中期の大集落として有名である。その遺構は現地表下約4mの堆積におおわれ、今回の調査ではこの遺構面には到達しなかった。遺跡は、楠根川などによって形成された自然堤防上の微高地に立地している。現在の標高はT.P.+4.5m前後を測り、近年市内で見うけられるように田園地帯から市街地への変貌が著しい。周辺には、近畿自動車道建設に伴う調査で大きな成果をあげている巨摩廃寺遺跡や、中世の若江城跡を含む複合遺跡である若江遺跡が隣接する。<sup>2)</sup>



第21図 瓜生堂遺跡第39次調査地位置図 (S=1/2,500)

調査地は東大阪市若江西新町2丁目地内の市道上と農道および用水路で、総長約180mである(第21図)。幅約1.6mの開削工事であり現地表下約2mまでを調査した。現場調査は中断を含め1991(平成3)年8月23日から10月17日まで行い、調査面積は約288m<sup>2</sup>である。

## 2 層序と遺構

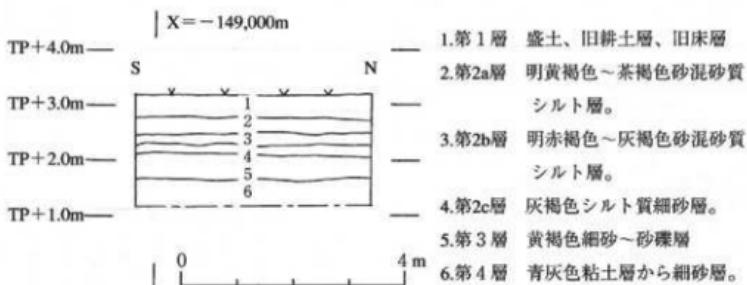
調査によって確認された層序と遺構は次のとおりであった(第22図)。

第1層 盛土、旧耕土層、旧床土層。

第2層 明赤褐色から灰褐色の細砂から細砂混粘質シルト層。a b cの3層に細分され、各層上面では幅約6m~10cm、深さ約40cmを測る東西方向の溝を5条検出した。いずれも耕作に伴うものと考えられ、鳥糞の一部である可能性がつよい。2b層から天目茶碗が、2c層から瓦器が出土しており、中世に整地あるいは搅拌されたものと思われる。

第3層 黄褐色細砂~砂礫層。ラミナが顕著に観察され、流水による堆積と考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

第4層 青灰色粘土層から細砂層。青灰色シルト、灰色細砂、暗青灰色粘土など数層に分層され、一部に植物遺体層を含む。近畿自動車道建設に伴う調査では本層上面あるいは層中で庄内期水田面を検出しているが、本調査では確認できなかった。

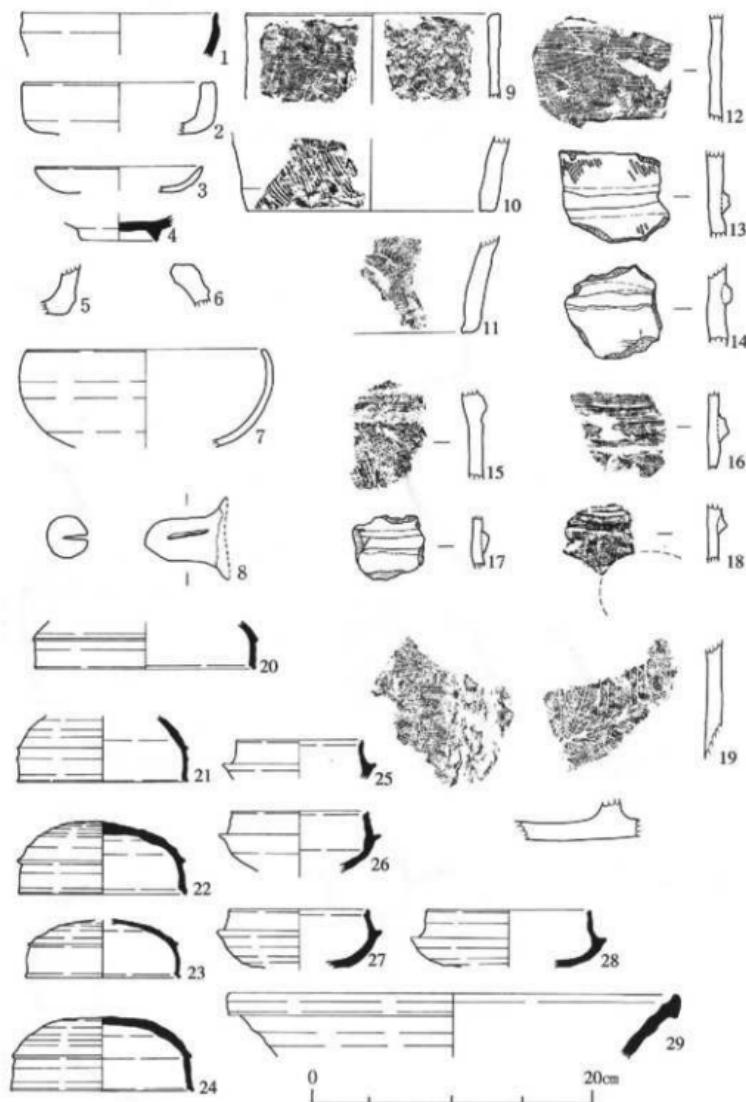


第22図 瓜生堂遺跡第39次調査土層断面図 (S = 1/100)

## 3 出土遺物

遺物のほとんどは第2層から出土した土器類と埴輪類である。検出した溝からは土師器と須恵器が出土したが、図示し得るものはなく、第4層から遺物は出土しなかった。

瀬戸焼の天目茶碗は第2c層から出土したもので(第23図1)、瓦質火鉢(第23図5・6)と共に15世紀頃のものと考えられる。銅鏡(第11図30)は腐食が著しく、「元□通宝」としか判読できない。銘に「元」の文字がつくものは「元豊通宝」(初鑄1078年)、「元祐通宝」(初鑄1086年)、「元符通宝」(初鑄1098年)等があり、いずれも宋銭である。

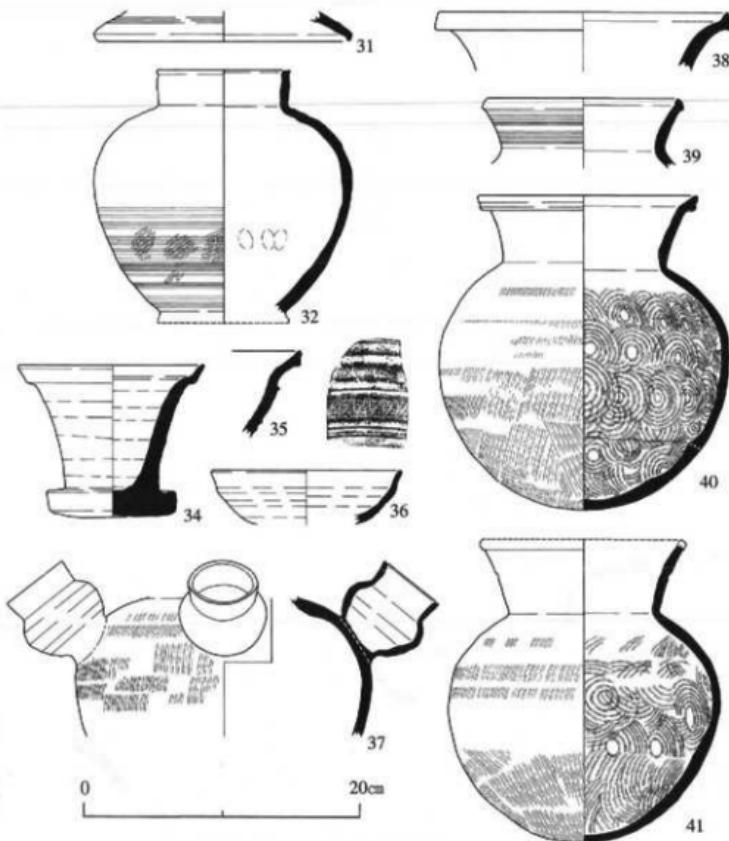


第23図 瓜生堂遺跡第39次調査第2層出土遺物実測図 (S = 1/4)

このほかに第2層からは8世紀頃の土器(第23図7)や古墳時代の土師器(第23図8)、埴輪類や須恵器類等が混在して出土している。

円筒埴輪は小さな破片のみで、径を復原したものの信頼に疑問がある(第23図9~18)。はけめは縦はけと横はけがみられ、B種横はけ(第23図12)も存在する。たがは断面が台形を呈するものと、丸みをおびる低いものがある(第23図17)。円形の透かし穴部分の破片が1点あり(第23図18)、黒斑のついた破片はみられなかった。また、硬質の焼成がなされているもの(第23図11・13)がある。これらの特徴から埴輪は5世紀中頃のものと考えられる。

形象埴輪は盾形と思われるものが1点出土した(第23図19)。円筒との接合部の一部で外面に



第24図 瓜生堂遺跡第39次調査北端部第2層出土遺物実測図 (S = 1/4)

綾杉文を線刻で表現する。

これらの埴輪の多くは調査区南半で出土した。

調査区北端部の第2b層から須恵器が集中して出土した。ほぼ完形の壺や、いわゆるこね鉢、子持壺などがある。6世紀前半と8世紀頃のものが多い。残念ながら子持壺などは軽量銅矢板によって破損している。本来は完全な形であったと考えられる。中世の整地、あるいは耕作時に投棄されたと思われる(第24図)。

他の須恵器は調査区北部から多く出土しており、坏蓋(第23図20~24)と坏身(第23図25~28)がほとんどである。蓋の中には頂部につまみが付く高坏の蓋である可能性がある。同様に身も脚の付く高坏である可能性がある。

第3層から出土した土器の多くは摩耗が著しい小片で、図示し得たものは少ない(第25図)。土師器壺(第25図43)は体部外面を横方向のはけで調整し、口縁部をなでて仕上げている。体部内面はへらけずりによる調整である。小型丸底壺(第25図44)や弥生土器底部(第25図46)などは摩耗が著しく調整は不明である。

### 3まとめ

今回の調査では瓜生堂遺跡を著名なものとしている弥生時代中期の包含層、遺構面には至らなかった。しかし、上層部の須恵器、埴輪などを含む包含層について資料を得ることができた。

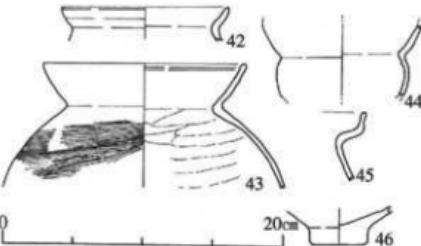
この包含層は15世紀以降の耕作と、それに伴う整地によって形成されたと考えられる。中世以前の様相は遺構が検出されなかつたため明瞭ではないが、中世包含層から出土した須恵器や埴輪などから8世紀頃と5世紀から6世紀頃のふたつの時期に中心があったと考えられる。

前者の時期に関しては、周辺の調査で8世紀頃の井戸や柱穴などが確認されており、第二寝屋川に近い今回の調査地にまで居住域が広がっていたためと想像される。

後者の時期に関しては、巨摩庵寺遺跡<sup>(2)</sup>や山賀遺跡<sup>(3)</sup>で検出されたような古墳が存在したと思われる。出土した須恵器に古墳に副葬される子持壺などがあることから推測される。

また、今回の調査では調査区の南部に埴輪の出土が多く、東に位置する瓜生堂遺跡第41次調査では多量の埴輪が出土している。<sup>(4)</sup>ところが、さらに東に位置する中央環状線車道部分の発掘調査では顕著な埴輪の出土は認められないとのことである。<sup>(5)</sup>したがって埴輪が多く出土する範囲は限られる。

河内平野中心部の遺跡から中世の遺物と共に埴輪が発見される例は多いが、出土数は少量である。多量に出土する地点は限られており、そのような地点に本來古墳が存在した可能性は非



第25図 第39次調査第3層遺物実測図 (S = 1/4)

常に高いと考えられる<sup>iii</sup>。

以上は推測の域にあるものであり、水道管理設に伴う発掘調査<sup>iv</sup>では「水に対する祭」との知見がなされている。しかし、今後の発掘調査では古墳が存在した可能性を意識して行うべきであろう。

#### 注

- (1) 財団法人東大阪市文化財協会「第4章 瓜生堂遺跡第39次調査」「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1991年度－」1992
- (2) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター「瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」1980
- (3) 同じ
- (4) 坂詰秀一「図録歴史考古学入門事典」柏書房1991
- (5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 1978
- (6) 財団法人東大阪市文化財協会「発掘調査成果展図録奈良時代の東大阪」1992等
- (7) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター「巨摩山賀(その2) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」1983
- (8) 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター「山賀(その2) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」1983
- (9) 本書第5章
- (10) 調査担当者の市本芳三、三好孝一氏の御教示による。  
(財)大阪文化財センター「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第4次－都市計画道路大阪中央環状線立体交差建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1995
- (11) 東大阪市遺跡保護調査会「瓜生堂上層遺跡」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報20 瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告」1979
- (12) 東大阪市遺跡保護調査会「上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書」1976

図	番号	種類・器種	口径×器高	圓化	色調(外面)	出土位置	備考
23	1	天目茶碗	14.8×・	反転	黒色	第2c層	瀬戸美濃産
23	2	土師質碗?	13.5×3.7	反転	にぶい橙色	第2b層	
23	3	土師質皿	11.8×1.8	反転	灰白色	第2c層	摩耗顯著
23	4	白磁	・ × ・	反転	明緑灰色	第2b層	底径5.2
23	5	瓦質火鉢	・ × ・	・	灰色	第2c層	復元不可
23	6	瓦質火鉢	・ × ・	・	灰色	第2b層	復元不可
23	7	土師器鉢	16.6×・	反転	にぶい橙色	第2c層	摩耗顯著
23	8	土師器瓶?	・ × ・	反転	橙色	第2c層	韓式系土器
23	9	円筒埴輪	18.0×・	反転	明褐灰色	第2c層	B種よこはけ
23	10	円筒埴輪	・ × ・	反転	橙色	第2c層	底径17.6
23	11	円筒埴輪	・ × ・	・	橙色	第2a層	
23	12	円筒埴輪	・ × ・	・	橙色	第2b層	B種よこはけ
23	13	円筒埴輪	・ × ・	・	にぶい黄橙色	第2c層	
23	14	円筒埴輪	・ × ・	・	浅黄橙色	第2c層	
23	15	円筒埴輪	・ × ・	・	橙色	第2c層	
23	16	円筒埴輪	・ × ・	・	にぶい橙色	第2a層	
23	17	円筒埴輪	・ × ・	・	橙色	第2b層	
23	18	円筒埴輪	・ × ・	・	浅黄橙色	第2b層	円形透穴部
23	19	盾形埴輪	・ × ・	・	浅黄橙色	第2c層	
23	20	須恵器壺蓋	15.6×・	反転	灰色	第2b層	
23	21	須恵器壺蓋	10.3×・	反転	灰色	第2c層	
23	22	須恵器壺蓋	12.0×5.2	反転	灰色	第2b層	
23	23	須恵器壺蓋	11.0×4.0	完形	灰色	第2b層	
23	24	須恵器壺蓋	12.2×4.8	反転	灰色	第2a層	
23	25	須恵器壺	9.0×・	反転	灰色	第2c層	
23	26	須恵器壺	8.2×・	反転	灰色	第2c層	
23	27	須恵器壺	9.7×4.3	反転	灰色	第2c層	
23	28	須恵器壺	12.6×4.4	反転	灰色	第2b層	
23	29	須恵器壺	31.8×・	反転	灰色	第2c層	
23	30	銅錢	・ × ・	・	・	第2b層	「元□通宝」

第3表 瓜生堂遺跡第39次発掘調査出土遺物一覧表1

団	番号	種類・器種	口径×器高	國化	色調(外面)	出土位置	備考
24	31	須恵器坏蓋	18.0×・	反転	灰色	第2b層	
24	32	須恵器壺	9.6×・	合成	灰色	第2b層	
24	33						欠番
24	34	須恵器鉢	13.0×11.0	完全	灰色	第2b層	ほぼ完形
24	35	須恵器器台	・×・	・	灰色	第2b層	
24	36	須恵器器台	11.0×・	反転	灰色	第2b層	
24	37	須恵器壺	・×・	合成	灰色	第2b層	子持ち壺口径5.0
24	38	須恵器壺	10.3×・	反転	灰色	第2b層	
24	39	須恵器壺	13.6×・	反転	灰色	第2b層	
24	40	須恵器壺	15.8×22.7	完形	灰色	第2b層	ほぼ完形
24	41	須恵器壺	・×21.7	完形	灰色	第2b層	口縁破損ほぼ完形
25	42	弥生土器	12.0×・	反転	淡黄色	第3層	壺口縁、摩耗顯著
25	43	土師器甕	14.2×・	反転	黄白色	第3層	内面へら削り
25	44	土師器壺	・×・	反転	にぶい黄橙色	第3層	丸底壺、摩耗顯著
25	45	弥生土器	・×・	・	にぶい黄橙色	第3層	壺口縁、摩耗顯著
25	46	弥生土器	・×・	反転	にぶい橙色	第3層	壺？底部摩耗顯著

第4表 瓜生堂遺跡第39次発掘調査出土遺物一覧表2

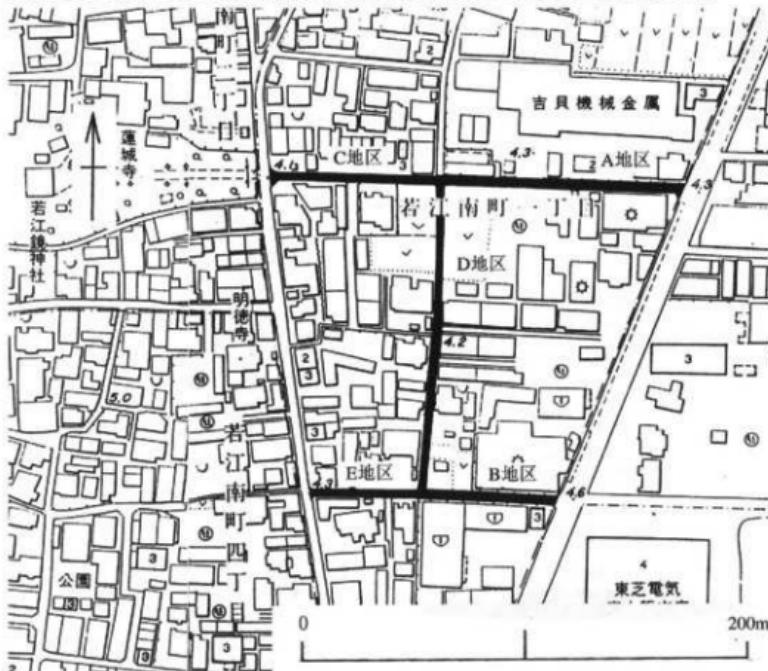
\*・は計測不可を表し、完形は国化部分が遺存、合成は一部を反転復原し国化したもの。

## 第7章 若江遺跡第56次調査概要

### 1 はじめに

若江遺跡は河内平野のほぼ中央に位置し、東大阪市若江本町2～4丁目、若江北町2・3丁目、若江南町1～4丁目、瓜生堂2丁目一帯に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。これまでの調査で弥生時代の方形周溝墓や水田跡、鎌倉時代から室町時代の住居跡、南北朝期から天正8(1580)年迄存続した若江城関係の堀や土塁、逆茂木、礎石建物、埠立建物などの遺構、律令制下の郡寺と想定される若江寺所用と思われる瓦などの遺物の出土が確認されている。

本調査は平成6年度公共下水道管渠築造工事に伴い、府道八尾枚方線と木村通りに挟まれた若江南町1丁目地内で実施した。A～E地区と仮称する5地区的合計面積431m<sup>2</sup>の現地調査を平成6年4月21日～11月15日まで行った。なお整理作業は現在も継続しているため詳細は後日に譲ることとし、ここでは現地調査で得られた概要を報告するに止めることとしたい。



第26図 若江遺跡第56次調査位置図 (S=1/2,500)

## 2 調査概要

### 1) A地区

本地区は府道八尾枚方線から若江鏡神社に向けて約100mの区間である(第26図)。西端では公共下水道築造に伴って第46次発掘調査が行われ、13世紀頃の土壌が検出されている。<sup>(1)</sup>既設管によって現地表から90cm前後まで搅乱されていた。調査区の北と南には水道管とガス管が埋設されており、土層断面を全体的に観察することは不可能であった。したがって層位的な面では十分な調査とは言い難い。幅約1mの調査区で平面的な遺構検出に重点を置く調査となった。

東端から西へ約20m分は小さなピットをいくつか検出したのみで、遺物も包含層から土師器や須恵器の細片が少量出土したのみである(図版第15)。

この結果から弥生時代中期までの若江遺跡の東限は府道八尾枚方線付近としてよいと思われる。ただし、現地表から約2m以下に埋もれる弥生時代中期や前期の遺構や遺物については不明である。

吉貝機械金属正門付近以西では中世の溝や土塹、井戸、ピット等を検出した(図版第16)。その下層には弥生時代中期のピットや土壙が検出されたが(図版第17)、両時期とも調査区の全域に広がるものではなかった。弥生時代の遺構は古墳時代前半までの流路もしくは洪水によって、中世の遺構は近世の遺構や既設管によって削平されたものと思われる。

### 2) C地区

本地区は第46次発掘調査A地区から若江鏡神社前にかけての約70mの区間である(第26図)。既設管によって現地表下1m前後まで搅乱されていた。調査区の北と南には水道管とガス管が

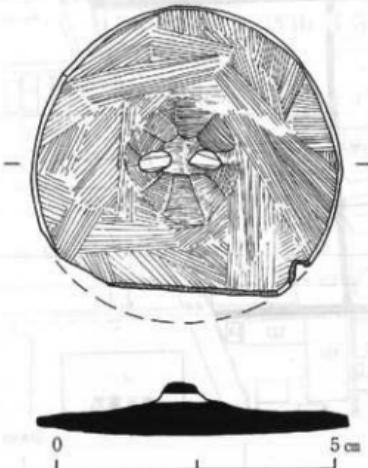
埋設されており、土層断面を全体的に観察することは不可能であった。したがって層位的な面では十分な調査とは言い難い。

調査区のはば全域で近世の土塹や井戸、溝、ピット等を検出した(図版第18)。搅乱を除去した段階で検出したものである。

土壙には桶を埋設したものも検出されたが、最下段の底板が残るだけで性格は不明である。埋土からは大量の陶磁器や瓦類、木製品が出土した。その状態から桶を放棄した後、ゴミ処理用の穴として利用したと考えられる。同様に土壤の多くはゴミ処理用の穴として利用されたものと考えられる。出土遺物には陶磁器、土師器、土人形、漆塗、木製品、ざる等がある。

同一の面で8世紀前半に埋められた土壙を1

第27図 鏡形石製模造品実測図(S=1/1) 基検出した。大半が調査区外にのび、全体の規



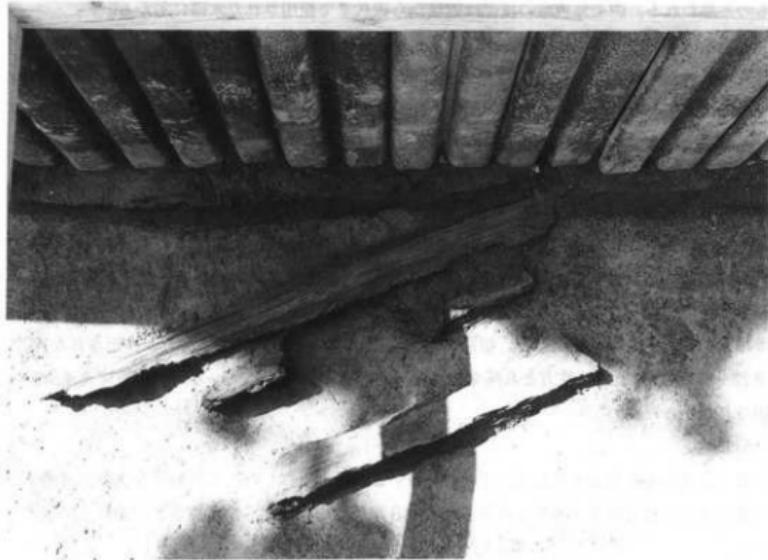
模や形状は不明である。出土した土器は土師器壺や碗など供膳具がほとんどを占める。

遺構のベースとなる地層は緑灰色シルト層や黄灰色細砂から中粒砂層等が複雑な堆積をなしていた。調査区の西部では黄灰色シルト混中粒砂層から鏡形石製模造品が出土した(第27図)。軽量鋼矢板によって破損している。直径約5.5cmの不整円形で、紐を忠実に表現している。裏面には加工痕を残し、表面は平滑に仕上げている。緑色を呈し、材質は蛇紋岩であろう。

同一層から須恵器と弥生時代後期から古墳時代前半の土器が出土している(図版第19)。前述のように調査区に隣接して水道管とガス管が埋設されており、この須恵器は混入の可能性が高い。したがってこの鏡形石製模造品は古墳時代前半のものと思われる。

また、別の地点では腐食した板状木製品を検出した。本来は幅50cm以上、長さ約140cm以上の板であったと思われる。共伴する遺物が出土しなかったため時期は明らかではない。緑灰色シルト層から出土しており、鏡形石製模造品とは層位が異なると考えられる。あるいは近世か近代のごく新しい時期とも思われる(第28図)。

本地区では中世の顯著な遺構は確認できなかった。近世の遺構や既設管によって削平されたものと思われる。



第28図 若江56次発掘調査C地区板状木製品出土状況

注

- (1)財團法人東大阪市文化財協会「第8章 若江遺跡第46次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1991年度-』1992

### 3) B 地区

若江遺跡の東部を縦断する府道八尾枚方線から、西へ56m間をB地区と仮称し、地表下150～160cmまで人力掘削を行った。地表下40～80cmで近年の盛土、その下層では近世耕作土及び中世の遺物包含層、調査地の東側では地表下110cm以下で古式土師器を包含する古墳時代前期の河道と思われる堆積層が認められた。

遺構は溝2条、ピット1基、暗渠、瓦・木積遺構などが検出された(第29図・図版第24)。

溝1は最大幅180cm、深さ80cm以上に及び、溝内には杭が3本打ち込まれていた。長径35cm以下の礎2個、瓦器椀・備前焼擂鉢などが出土し、室町時代に使用されたものと思われる。ピット長径45cm、深さ30cmで、須恵器・土師器の細片が出土しているが、遺構の使用年代は不明である。溝2は幅60～80cm、深さ60cmで、瓦器椀・陶器擂鉢などが出土し、室町時代に使用されたものと思われる。瓦・木積遺構は瓦を3段以上積み上げ、地表下1.2mで幅23cm、長さ55cm以上の板材を敷き、周辺に杭が打ち込まれていた。東側の搅乱地点より当遺構検出付近は、近世の搅拌が掘削底の地表下1.5mまで認められることから、近世の水路に伴う足場、あるいは木道と考えられる。暗渠は瓦質の土管を南西南から北北東に3本繋いでいた。近世に使用されたものと思われる。調査地西端の搅乱は近世から近代まで使用された水路にあたる。

### 4) D 地区

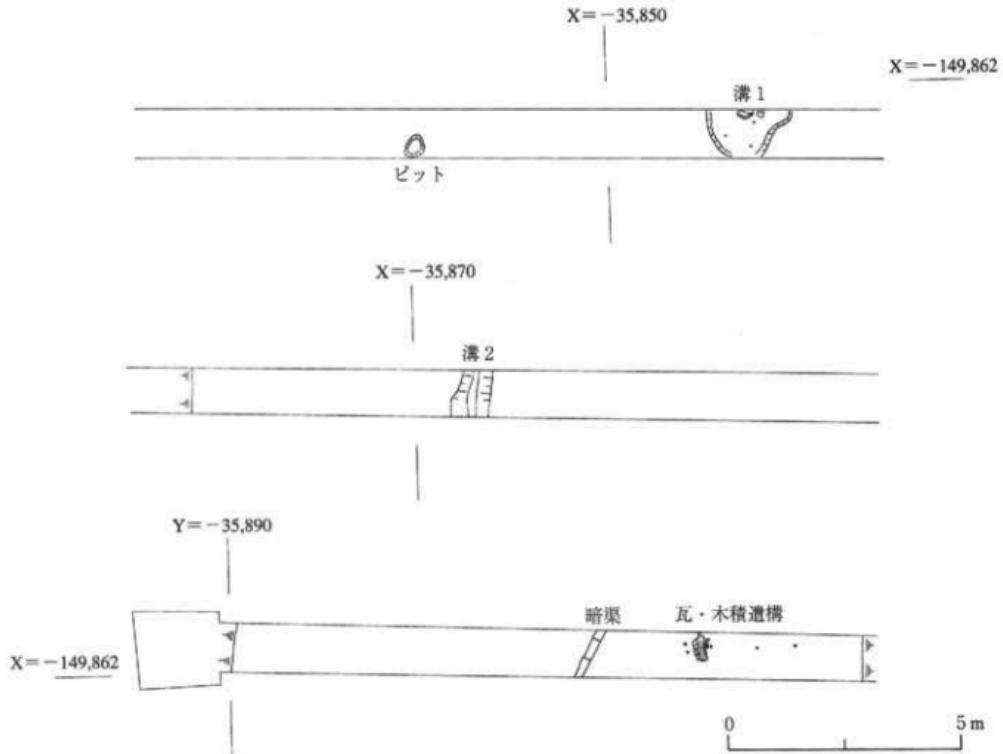
A・C地区的交点にあたる若江遺跡第46次調査地より、B・E地区の交点までの南北135mをD地区と仮称した。

現地表面はT.P.4.3m前後で、その下方には層厚約60cmの盛土、層厚約10cmの旧耕土、以下近世及び中世の遺物包含層が続き、T.P.3.4m前後で中世の遺構が検出された。この地区的北端では第46次調査地と同様に、T.P.3.0m前後で古墳時代前期の遺物を包含した砂礫層、南端ではT.P.3.2m前後で古墳時代後期頃の褐灰色のシルト層が確認された。

遺構では、南東から北西に水を引くために瓦質の土管を5本繋いだ近世の暗渠、直径約50cm、深さ30cmの曲物を3段積み重ねた鎌倉時代の井戸、幅約280cm、深さ約68cmで灰・炭が約50cm堆積していた平安時代後期の溝、幅約100cmで不定形の室町時代の土壤などが検出された(図版第22～24)。この地区は枚方と八尾を結ぶ旧河内街道に比定されているが、街道関連遺構は検出されなかった。

### 5) E 地区

B・D地区の交点より木村通りまでの48mをE地区と仮称した。この地区もまた旧河内街道にあたるが、街道関連の遺構は検出されず、B地区西端で確認した水路が木村通りまで続いている。



第29図 若江56次調査B地区遺構平面図 (1/120)

### 3まとめにかえて

今回の調査は若江遺跡の南東部にあたる地域で実施した。その結果B地区で中世の遺構が僅かながら確認され、若江遺跡の範囲がさらに南東に広がる可能性が高まった。また当遺跡では弥生時代の遺構については、第33次調査で中期の方形周溝墓、第35次調査で後期の水田址が確認されていたに過ぎなかった。<sup>32)</sup>しかし今回、A地区で弥生時代中期のピットおよび土壙が検出され、当時の集落の広がりを解明する手掛かりを得られたものと思われる。

### 注

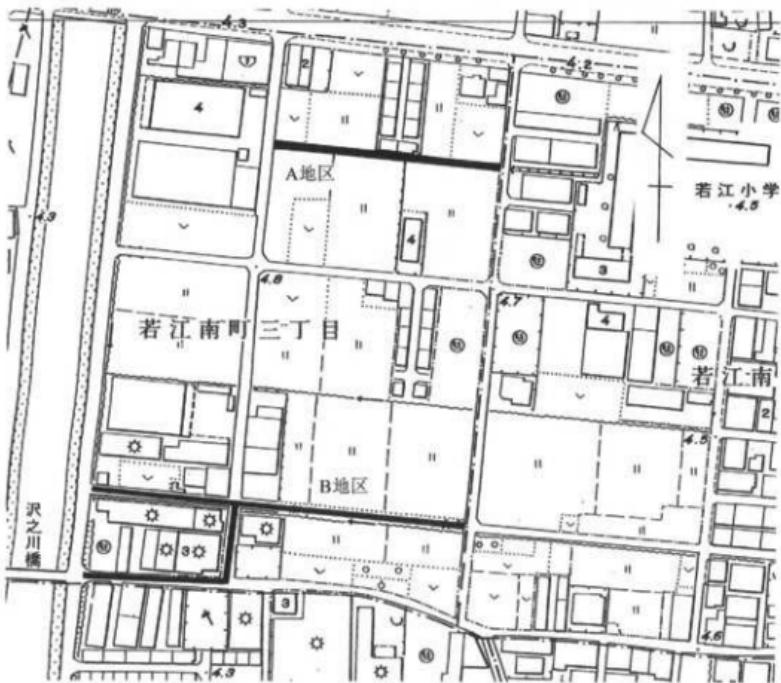
(2) 財団法人東大阪市文化協会『若江遺跡第32・33次発掘調査報告書』1990

財団法人東大阪市文財化協会『若江遺跡第35次発掘調査報告書』1989

## 第8章 若江遺跡第57次調査概要

### 1はじめに

発掘調査を実施した地点は東大阪市若江南町3丁目に所在し、若江小学校から真西に35m離れた田畠のなかを走る水路(100m)A地区と水路から約165m南の道路B地区である。周辺は旧集落からはずれており、東大阪市の緑化指定地域である。この水路は条里状地割りの痕跡かもしれない。また田畠は高低差がみられ旧来の島畠とも考えられるが、すぐ西側の楠根川が近年改修された時に盛り土で整地されたと地主さんから聞く。西側は弥生時代から古墳時代の水田面が何枚も重なって発見された若江北遺跡と隣り合う。若江小学校内の調査をはじめ周辺の調査で中世の若江城に関する遺構、遺物が検出されている。1996年3月現在、A地区の調査地の水路の北側の東3分の1は集合住宅に変っている。今回の調査は下水管渠築造工事に伴うもので期間が、1995年1月24日～5月2日と2年度に渡ったため全体の報告は次の予定であるが、A地区調査地の水路のほぼ中央で平安時代後半の瓦器鉢と土師器を伴う土坑(井戸の可能



性も高い)を検出し、その資料が良好なため先に紹介する。

## 2 調査の方法

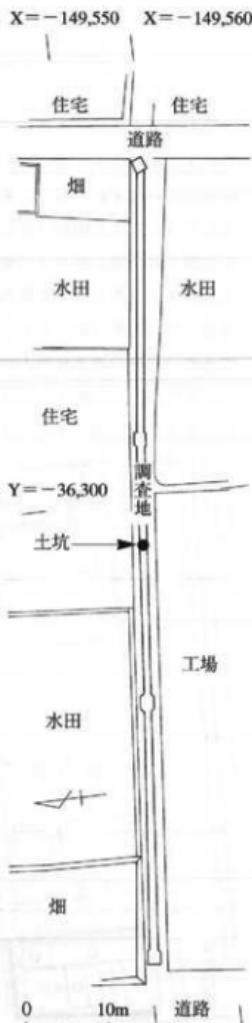
業者が工事の前に機械の侵入路をつくるため水路を埋め戻されたが、事前にその連絡がなかったため、現況の確認が出来ないままであった。また現場担当者は遺跡調査をすることも聞いてなかったということで責任者が突然変わられ、人力掘削にたいしても抵抗されるなど、調査はかなり難行した。調査は約8m毎に地区割りをし、東から西にむかっておこなった。実測の基準には国土座標第VI系を使い、基準点の設置は三和航測株式会社に委託した。上層の盛土、ヘドロを機械掘削し、以下工事の最深部まで人力掘削で遺構、遺物の確認をしながら平面、断面の精査を行った。

## 3 遺構と遺物

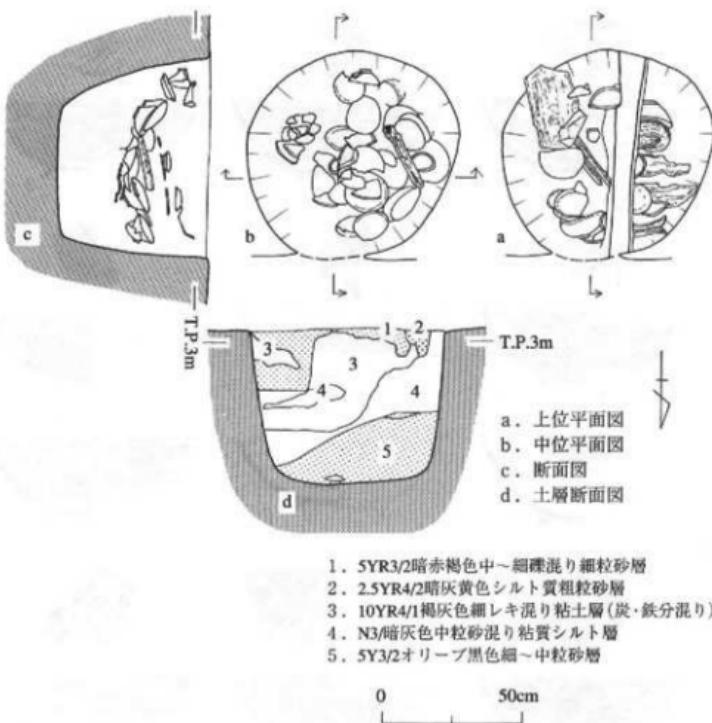
土坑1はこの調査地点の水路全体が平安時代には楠根川支流の氾濫原であったと考えられる層から検出されたが、上層は削られている可能性がある。上面東側半分は砂層、西側は砂質土層で直径70cmの平面プランはほぼ円形で、調査地の幅1mのなかにすっぽりはまる位置にあり円周に沿って杭跡がみられる。掘り方の壁面は垂直に近いが深さは55cmを測り、やや断面逆台形を呈している。上位にオリーブ色細粒砂をかみ薄い板状木製品、土師器、瓦器碗、その下に真っ赤な鉄分の沈着した粘土を挟み中位から瓦器碗、土師器、焼きこげのある棒が出土している。土師器、瓦器碗はほとんど完形品である。

これらはなんらかの祭祀後に一括で廃棄したとも考えられるが土坑の性格は今後の課題である。土坑の底面は粘質シルトを掘りぬいて、鉄分が沈着し細レキ混じり細砂層に達しているが、現在は湧水がみられない。

<この土坑以外の遺構については後日に報告する予定であるが土坑の東側からは弥生時代中期の溝、水田跡、旧河道、古墳時代から平安時代の水田跡と条里制に伴うと考えられる畦畔、置石を検出している。西側からは弥生時代、古墳時代の旧河道、中世の耕作土と遺物包含層を検出している。>



第31図 若江遺跡第57次平面図

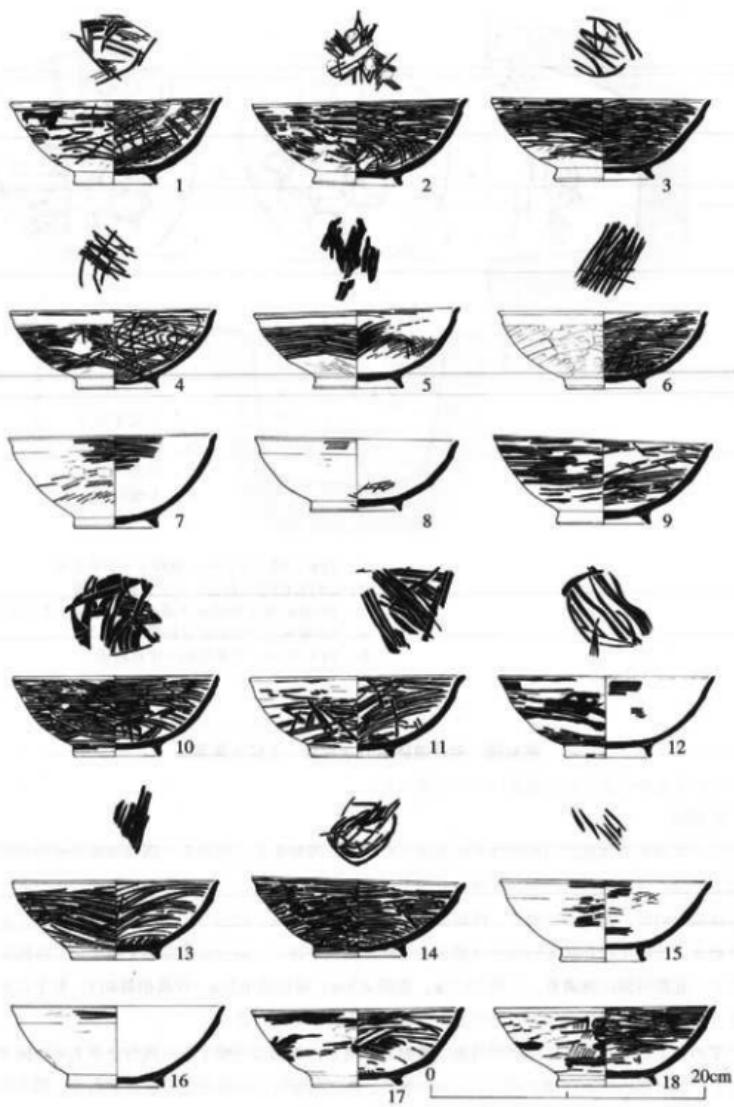


第32図 若江遺跡第57次調査 土坑1実測図

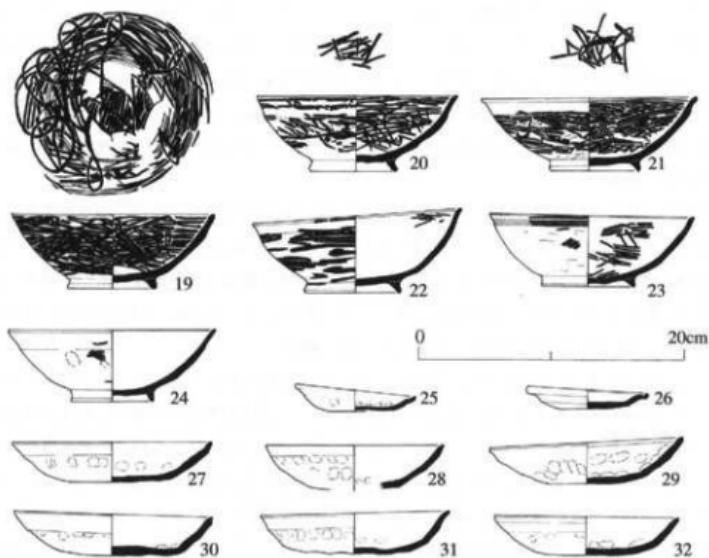
次に土坑から出土した遺物について述べる。

#### 瓦器碗

- 深い半球形の体部に口縁部はやや湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は断面逆台形で外開きに付く。口縁部は内外面を横ナデの上にヘラ磨き、外面には口縁部下に指押さえがあり体部は削りの後、密なヘラ磨き。内面は体部にはナデ調整後、見込みにかけて格子状を呈するヘラ磨き、その上から乱方向のヘラ磨き。一部に油膜が付く。高台は接合部を横ナデし自然さをだす。底部外面は無調整。口径 15.7cm、器高 6.3cm、高台径 6.7cm、径高指数 40.1、胎土に長石を含む。色調は黒色。外面に径約 5cm の重ね焼き痕がある。硬質。
- 深めの半球形の体部に口縁部外面は湾曲して開き、端部は内傾する。高台は厚手で外開きに付く。口縁部内外面は横ナデの上にヘラ磨き、体部外面には指押さえの痕跡があり、削りの後に密なヘラ磨き。体部内面は見込みに指押さえがあり、斜格子状にヘラ磨きの後、体部にかけて乱方向のヘラ磨き、体部上位には圓線状の密なヘラ磨き。高台内面はナデ付けにより稜線が



第33図 若江遺跡第57次調査 土坑1出土瓦器碗実測図



第34図 若江遺跡第57次調査 土坑1出土瓦器碗、土器皿実測図

走る。底部外面は削り。口径 16.1cm、器高 6.6cm、高台径 5.8cm、径高指数 40.1、胎土は精緻。色調は内面が銀色で外面は黒色だが部分的に銀色の釉が流れたよう付く。断面は灰白色、外面に約 3cm、内面に約 7cm の重ね焼き痕がある。硬質。

3) 深い体部に口縁部は緩く湾曲しながら開き、端部を丸く納める。高台は細目で高い。口縁部は内外面を横ナデの上にヘラ磨き、体部外面は削りの後に密なヘラ磨き。体部内面は見込みにジグザグ状平行線のヘラ磨きの後に幅の細い圓線状の密なヘラ磨き。高台はナデ付け、底部に粘土の余分が突起状を呈す。口径 16.2cm、器高 6.2cm、高台径 7.4cm、径高指数 38.3、胎土は精緻。色調は褐色から黒色、断面灰白色。外面約 9cm、内面約 6cm の重ね焼き痕がある。内外面に部分的に油膜が付く。硬質。

4) 丸底で半球形の体部に口縁部外面は湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は断面三角形を呈し端部は面をもつ。口縁部は内外面を横ナデの上にヘラ磨き、外面体部は削りの後に六分割性の密なヘラ磨き。体部内面は見込みに平行線のヘラ磨きを施し、その上に体部にかけて乱方向のヘラ磨きと連結輪状風のヘラ磨き。高台はナデ付けるが体部との継目を残す。底部外面は削り。口径 15.4cm、器高 5.8cm、高台径 6.2cm、径高指数 37.7、胎土は精緻。色調は内面はいぶし銀色、外面は黒色から銀色。重ね焼き痕がある。硬質。

5) 深い半球形の体部に口縁部外面は湾曲して開き、端部をやや尖り気味に納める。高台はやや高めで先細りになる。口縁部内外面は横ナデの上にヘラ磨きをかける。外反する面にはヘラ磨

きがない。外面体部は四分割性による削りの後にヘラ磨き。体部内面は見込みにジグザグ状のヘラ磨きの後、体部にかけて半円状にヘラ磨き。高台内面は粘土が伸びずに底部に段差を残す。底部外面は削り。内面は点状に劣化している。口径15.1cm、器高5.75cm、高台径6.5cm、径高指數37.7。胎土は最大7mmから微砂粒の石英、長石、角閃石を含む。色調は黒色でヘラ磨きの箇所は銀色。外面約9cm、内面3cmの重ね焼き痕がある。口縁部内面は二次焼成のため濃茶褐色を呈す。硬質。

6) 半球形の体部に口縁部は外面が湾曲して開き、端部を丸く納める。高台はやや厚手で端部は丸みをもつ。外面の口縁部はナデのまま、体部は六分割性の板状原体による削り目の線が走る。内面の口縁部はヘラ磨き、見込みは平行線状のヘラ磨き、体部は密な圓線状のヘラ磨き。高台は底部に幅広いナデ付け。底部外面は削り。口径15.5cm、器高5.8cm、高台径5.7cm、径高指數37.4、胎土は精緻、色調は灰黒色、断面は灰白色。硬質。

7) 半球形状の体部に、外面口縁部は僅かに湾曲し内面は屈曲部をもって開く。端部を丸く納める。高台は断面三角形を呈すが疊付は僅かに面をもつ。内外面共劣化が顕著、炭素の吸着もない。調整は体部に削りと一部のヘラ磨き以外殆ど残らない。高台はナデ付け。底部外面は無調整。口径14.9cm、器高5.4cm、高台径6.6cm、径高指數36.2。胎土は最大2mmから微砂粒の石英、長石、角閃石を含む。内外面は橙色で断面と劣化部分は乳黄色、口縁部は灰褐色。軟質。

8) 丸底で半球形の体部に、口縁部は強いナデにより段をもちそのまま開き、端部を丸く納める。高台は厚手。断面三角形を呈し、やや外向きに付き端部を丸く納める。内外面共劣化が顕著。口縁部は横ナデの上に細い線のヘラ磨き、外面体部はほぼ中央部に指押さえがあり、削りの後にやや緻密なヘラ磨き。内面も圓線状の緻密なヘラ磨き。高台は底部に幅広くナデ付け。底部外面はナデ。口径15.5cm、器高7.0cm、高台径6.2cm、径高指數45.2。胎土には石英、長石などの砂レキを含む。色調は黒色、断面は乳褐色。軟質。

9) 深めの半球形の体部に口縁部外面は湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は断面三角形を呈す。内外面共劣化が顕著。口縁部は横ナデの上にヘラ磨き、外面体部は二段の指押さえがあり、緻密なヘラ磨き。内面は板状の原体によるナデの上に乱方向に細いヘラ磨き。高台はナデ付けで外面に雜目を残す。底部外面はナデ。口径16.1cm、器高6.3cm、高台径6.7cm、器高指數39.3。胎土には石英、長石などを含む。色調は黒色、断面は乳褐色。軟質。

10) 半球形の体部からそのまま口縁部に至り口縁端部を丸く納める。高台は器厚が厚く断面U字型を呈す。口縁部は外面を横ナデの上にヘラ磨き、外面は分割性のヘラ磨き。外面から内面にかけて点状に劣化。内面は見込みに太い線のヘラ磨き、体部には見込みと一体となって密なヘラ磨き。高台はナデ付け。底部外面はナデ。口径15.2cm、器高6.0cm、高台径6.3cm、器高指數39.5。色調は灰黒色、断面は灰褐色。内面に油膜が付く。胎土は白色、黒色の砂粒を含む。外面に約5cmの重ね焼き痕がある。硬質。

11) 深めの半球形の体部に口縁部は屈曲して括がり端部を丸く納める。高台は断面U字型を呈す。内外面共劣化が顕著。口縁部は内外面共横ナデの上に粗いヘラ磨き、外面体部は削りの後

に密なヘラ磨き。内面は体部に乱方向の密なヘラ磨きの後、見込みに幅の広いジグザグ状平行線のヘラ磨き。高台はナデ付け外面に継目を残す。底部外面は無調整。口径15.8cm、器高6.0cm、高台径5.8cm、器高指数38.0。胎土は黒色砂粒を含む。色調は灰褐色から黒褐色。重量感があり、硬質。

12) 半球形の体部に口縁部外面は湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は器厚が薄く湾曲しながら付く。口縁部内外面は横ナデの上に粗いヘラ磨き。外面体部は面的には密であるが粗いヘラ磨き。内面見込みは劣化し不鮮明だが平行線状のヘラ磨きが残る。体部は圓線状に密なヘラ磨き。高台はナデ付け。端部は脆く破損している。底部外面は無調整。口径15.8cm、器高6.0cm、高台径6.4cm、器高指数38。胎土に石英、長石、赤色の砂粒を含む。色調は漆黒色、断面は灰褐色。軟質。

13) 半球形の体部に口縁部外面は僅かに湾曲して開き、端部を先細りに納める。高台は逆台形を呈す。口縁部は横ナデの上にヘラ磨き。外面体部の下半部を四分割性にヘラ磨きの後、上半分を横方向にヘラ磨き。内面はジグザグ状平行線のヘラ磨きの上に体部にかけてやや粗く圓線状の太いヘラ磨き。高台はナデ付けているが内外共継目が明瞭。底部外面はナデ。口径15.4cm、器高5.9cm、高台径6.7cm、径高指数38.3。胎土は微砂粒を含む。色調は外面は口縁部の一部以外炭素の吸着がなく、乳灰色。内面は黒色で二次焼成の煤の付着があり、口縁部の小破碎面にも付着。重ね焼き痕がある。重量感があり硬質。

14) 丸底で半球形の体部に口縁部は大きく括り僅かに湾曲して開き、端部をやや尖り気味に納める。高台は内面が屈曲し「く」の字型になり端部を丸く納める。口縁部内外面は横ナデの上にヘラ磨き。外面体部は六分割性のヘラ磨き、内面は見込みに無作為のヘラ磨きの後、体部に太いヘラ磨きを圓線状に密に施す。高台はナデ付け。底部外面はナデ。口径15.7cm、器高5.7cm、高台径7cm、径高指数36.3。色調は黒色、ヘラ磨きの箇所は銀色、断面は乳灰色。白色、黒色の微砂粒を含む。外面に5cmの重ね焼き痕がある。重量感があり硬質。

15) 半球形の体部に口縁部外面は湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は薄手で豊付は外に張り出し幅広になる。内外面共、器表面の劣化が顕著。外面口縁部はナデの上にヘラ磨き、外面体部は太いヘラ磨き。内面は見込みに平行線、体部に圓線状の細いヘラ磨きの痕跡がある。高台は外面のナデ付けが雑。底部は無調整。口径15.4cm、器高6.1cm、高台径6.4cm、径高指数39.0。胎土は1~2mmの石英、長石、角閃石などの砂粒を多量に含む。色調は黒色、断面は乳褐色。軟質。

16) 丸底で半球形の体部に口縁部は軽く湾曲して開き、端部を尖り気味に納める。高台は断面三角形を呈す。内外面共劣化が顕著。外面体部に削りと口縁部の一部にヘラ磨きが残る。高台はナデ付け。口径15.8cm、器高6.1cm、高台径7.1cm、径高指数38.6。胎土は1~2mmの石英、長石、角閃石などを含む。色調は黒色、断面と劣化面は淡褐色。軟質。

17) 半球形の体部に口縁部外面は僅かに湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は低い断面逆台形で豊付の幅は不均一。口縁部は横ナデの上にヘラ磨き。外面体部は太いヘラ磨き。内面は

部分的に磨耗。見込みに平行線のヘラ磨き、見込みと一体になり体部には太いヘラ磨き。高台は内外面に接合部を残す。底部は無調整。口径15.7cm、器高5.7cm、高台径6.5cm、径高指數36.3。胎土は1~2mmの石英、長石、角閃石などを含む。色調は黒色、断面と劣化面は乳褐色。外面に10cmの重ね焼き痕がある。軟質。

18) 半球形に近い体部に口縁部は大きく開き、端部を内傾気味に丸く納める。高台は薄手で高く、端部を尖り気味に納める。口縁部内外面はナデの上にヘラ磨き。外面体部は削りの後、粗いヘラ磨き。内面は見込みに指押さえ、体部に圓線状の密なヘラ磨き。高台はナデ付け。底部外面は無調整。口径16.1cm、器高5.9cm、高台径7.2cm、径高指數36.6。胎土は精緻、色調は黒色、断面と炭素沈着のない内面の半分は淡灰色。2の瓦器椀に形態、調整が類似。重量感があり硬質。

19) 半球形の体部からそのまま口縁部に至る。端部を丸く納める。高台は厚手、面取りした豊付をもつ。口縁部外面は横ナデの土にヘラ磨き。体部外面は八分割性による密なヘラ磨き。内面は見込みに密な平行線のヘラ磨き、体部に太いヘラ磨きを施しその上に連結輪状文のヘラ磨き、さらに連結輪状の下部に細いヘラ磨きを重ねる。高台外面はナデによる凹線をもつ。底部は丸くナデ調整。口径15.3cm、器高5.6cm、底径6.8cm、器高指數36.6。胎土は精緻。色調は黒色、ヘラ磨きの部分は銀色、断面は灰白色。外面は4cm、内面は3cmの重ね焼き痕がある。硬質。

20) 半球形の体部に、口縁部の下部にナデによる湾曲面をもちながら開き、端部を内傾風にし丸く納める。高台は外面が内湾し、端部を丸く納める。口縁部外面は横ナデの上にヘラ磨き。体部は中位に指押さえが一周し、やや粗いヘラ磨き。内面は見込みにジグザグ状のヘラ磨き、体部には見込みから乱方向にヘラ磨き。高台はナデ付け、内面が点状に劣化。底部外面はナデ調整。口径15.3cm、器高5.8cm、高台径6.6cm、径高指數37.9。胎土は精緻。色調は灰黒色、ヘラ磨きの箇所は銀色、断面は灰色。重量感があり硬質。

21) 半球形の体部に口縁部はやや外向きに湾曲しながら大きく開く。端部を丸く納める。高台は断面三角形で端部に近い箇所に陵線をもつ。口縁部外面は横ナデの上に凹面以外をヘラ磨き、外面体部は削りの上に密なヘラ磨き、内面は見込みに連結輪状風のヘラ磨きの後、体部にかけて密なヘラ磨き。高台はナデ付け、底部外面に複数の線による「×」印がある。口径16.2cm、器高5.6cm、高台径6.8cm、径高指數34.1。胎土は精緻。色調は灰黒色、ヘラ磨きの箇所は銀色。断面は白灰色。重量感があり硬質。

22) 半球形の体部に口縁部外面が僅かに湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は外面が内湾し端部が外方をむく。口縁部は横ナデの上にヘラ磨き、外面体部は四分割性に太いヘラ磨き、内面は口縁部付近にヘラ磨きが残る以外点状に劣化のため不明。高台はナデ付け。底部の調整不明。口径15.6cm、器高5.8cm、高台径7.2cm、径高指數37.2。胎土は最大5mmの砂レキ、1~2mmの砂粒を含む。色調は口縁部の一部の炭素の付着箇所は黒色、その他は白灰色。見込みは二次焼成により濃茶褐色を呈す。硬質。

23) 梗形の体部。口縁部はナデにより外面は沈線文状に、内面はその下部に凹面を呈す。高台は断面三角形を呈す。内外面共劣化が顕著。口縁部はナデの上にヘラ磨き、外面体部は削りの後に密なヘラ磨き、内面は見込みに平行線状のヘラ磨き、体部にやや粗いヘラ磨きが読み取れる。高台はナデ付け、底部外面はナデ。口径15.5cm、器高5.4cm、高台径6.9cm、径高指数34.8。胎土石英、長石、角閃石の砂粒を含む。色調は黒色、劣化面は白灰色。軟質。

24) 梗型の体部に口縁部外面は僅かに湾曲して開き、端部を丸く納める。高台は断面三角形を呈す。内外面共劣化のため調整は不明。体部中央に指押さえが残る。高台はナデ付け。口径15.5cm(復元値)、器高5.5cm、高台径6.2cm、径高指数35.5cm。胎土は最大2mmの石英、長石、角閃石、などを含む。色調は劣化面が灰黒色から乳褐色。軟質。

#### 土師器皿

25) 丸みのあるいびつな底部から外反する口縁部で端部は上方につまみあげ気味にして丸く納める。指押さえの後に口縁部は横ナデ、体部はナデ調整。底部外面に板状工具痕が残存。口径9.5cm、器高1~2cm。胎土精緻、クサリレキを含む。色調は淡橙色。

26) 平底から体部が立ち上がり、口縁部は外反して端部を内方に折り曲げる。内面は口縁部から底部にかけて横ナデ、底部はナデ。外面は口縁部を横ナデ、底部は無調整で指紋が残る。口径9.1cm、器高1.8cm。胎土は精良、微砂粒、クサリレキを含む。色調は灰白色、口縁部周辺は灰黒色。器厚が厚い。

27) 平底から体部は外上方へ開き、口縁端部を僅かに外反させ、丸く納める。内外面共口縁部を横ナデ、体部に指押さえを残しナデ調整。口径15.0cm、器高3cm。胎土は精良、最大1mmの石英、長石、角閃石を少量とクサリレキを含む。色調は灰乳色から淡桃色。

28) 丸みのある底部から体部は外上方に開き、口縁部がやや立ち上がり端部を尖り気味に納める。口縁部内外面を横ナデの後、体部を指押さえ。底部内面はナデ、外面には粘土の接合部、植物繊維の圧痕が残る。口径13.5cm(復元値)、器高3.2cm。胎土、色調は30と同じ。

29) やや丸みをもつ底部から体部は外上方に開き、口縁部が僅かに立ち上がり端部を丸く納める。口縁部内外面を、横ナデ、体部から底部にかけて指押さえの後に内面底部はナデ調整。外面底部には植物繊維の圧痕がみられる。口径14.5cm、器高3.0cm。胎土は精良。最大2mmの角閃石、石英、クサリレキを含む。色調は淡乳色から淡桃色。

30) 平底から体部は外上方へ開き、口縁端部を僅かに立ちあがらせ、端部を丸く納める。口縁部内外面は横ナデ。体部から底部にかけて指押さえの後、内面はナデ調整。底部外面には板状の成形台のものと考えられる痕跡がある。体部内面に煤が僅かに付く。口径14.8cm、器高3.2cm。胎土は精緻、クサリレキを含む。色調は白黄色。

31) 平底から体部は丸みをもって外上方へ開き、口縁部が僅かに外反し端部をやや尖り気味に納める。口縁部内外を横ナデ、体部から底部にかけて指押さえの後、内面はナデ調整。口径14.0cm、器高3.0cm。胎土は精良で微砂粒、クサリレキを含む。色調は淡乳黄色、口縁部内外面から内面底部にかけて煤付着。

32) 平底から体部は口縁部まで斜めに開き、口縁部を尖り気味に納める。口縁部内面を横ナデ、体部を指押さえの後ナデ調整。底部外面に少量の煤が付着。口径14.0cm、器高2.9cm。胎土は30と同じ。色調は灰乳黄色。

以上土坑1出土の瓦器椀、土師器について記述した土師器小皿(25・26)と大皿(27・30)が上位から出土しており、小皿はいわゆる「て」の字状口縁部をもつもので、平安時代後期通有のものである。瓦器椀はすべて和泉型である。形態は深い半球形の体部で口縁部が横ナデで湾曲して外反し、高台は外開きにつく厚手のものが多い。体部外面には指圧痕を残すものがある。調整は劣化や風化して不明のものがあるが、鮮明に残るものをみると、外面にヘラ削りを残すものが半分あり、ヘラ削りのままのもの(6)、分割を意識したヘラ磨きを施すものは全体の $1/3$ で、ヘラ削りの後に分割のヘラ磨きをするもの(3・4・5)もある。これらは胎土が精緻である。その他のものも割合密にヘラ磨きが施されており、調整が不明のものと合わせて胎土は粗い砂粒を含む。内面のヘラ磨きは見込みと体部が分化せず乱方向に施すものがあるが、分化を意識した暗文風のものが半分以上で、見込みには折り返し磨きで塗りつぶしたものか、平行線状のものが多く、平行線を重ねて斜格子状になるものもみられる。体部は圓線状のもの、圓線風に短い単位の磨きをつらねて施すもの、さらには連結輪状の装飾を意識したものもある。以上の特徴は瓦器椀のなかでも初現期のもので尾上氏の編年によると1-2期に、原田氏の編年によると1-2から2-1の時期のものに比定でき12世紀初頭前後頃までに納まるものと考えられる。<sup>1)</sup>今後、これらの初現期に近い瓦器椀、供伴の土師器皿などについてさらに東大阪を始め中南河内の出土例との比較検討をしていきたい。

#### 注

- (1) 尾上実 「南河内の瓦器椀」「藤沢一夫先生古希記念論集 古文化論集」1983
- (2) 原田昌則 「1壹振A遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」1986

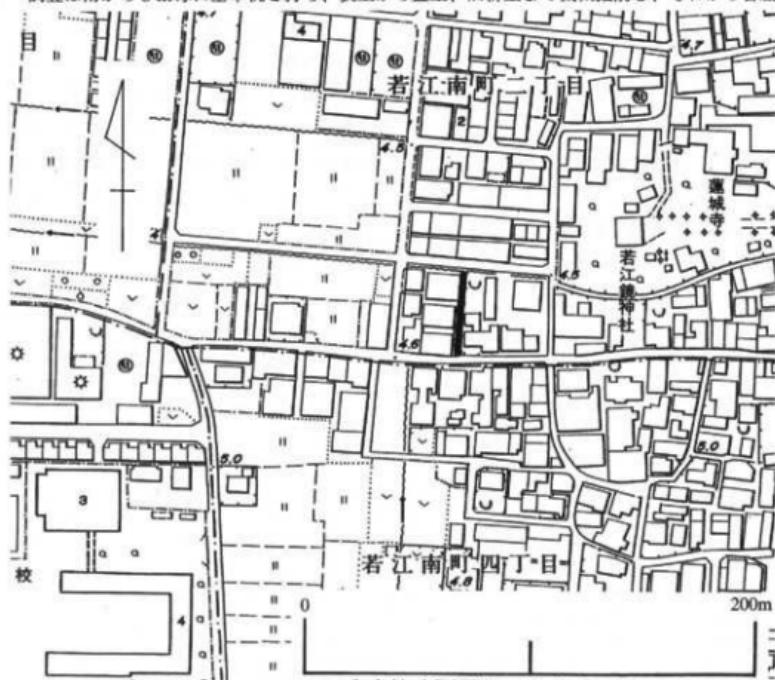
## 第9章 若江遺跡第58次調査報告

### 1 はじめに

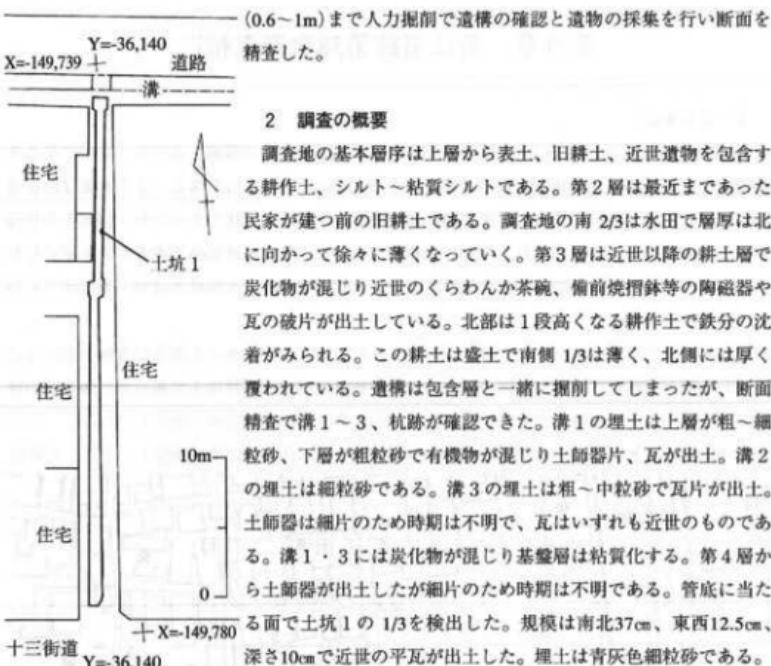
発掘調査を実施した地点は東大阪市若江南町2丁目の鏡神社の西側にあたり、東西に走る水路から十三街道筋までの南北方向の道路で長さは約33m、幅1.2mを測る。すぐ南側は山賀遺跡に接する。調査当時は東西に民家が建ち並び北側の水路はどぶ状であったが、1996年3月現在、この道路から西は整地され、集合住宅建築工事に伴う若江遺跡第65次調査が次年度に行われる。また北側の水路は暗渠に改修されている。今回の調査は下水管排水設備工事に伴うもので、期間は1995年12月1日～8日までかかった。

調査地点は旧集落からはずれた小字寺垣戸・垣戸で、古絵図にある光源寺の寺域か若江寺の存在した所と言われている。<sup>(1)</sup>周囲の民家のあった地点は戦前まで耕作土であった。調査前の試掘では旧耕作土下より管底までの間に土器器の小片を含む遺物包含層を検出している。

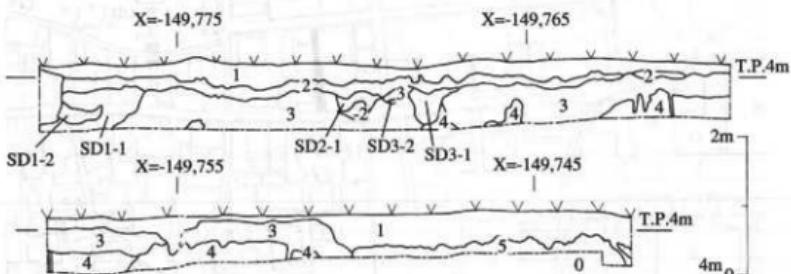
調査は南から8m毎に基準杭を打ち、表土から盛土、旧耕土まで機械掘削し、それから管底



第35図 若江遺跡第58次発掘調査位置図 (S=1/2,500)



第36図 若江58次平面図



- |                               |  |
|-------------------------------|--|
| 1. アスファルト、盛土                  | SD 1-1, 10YR5/2暗褐色中纏混り粗～細粒砂層 (土師・瓦片・炭混り) |
| 2. N4/灰色 巨纏混り中～細粒砂層 (磁器)      | -2, 10YR3/3暗褐色粗粒砂層 (磁器・木質遺物)             |
| 3. 2.5Y4/2 暗灰黄色中纏混り細粒砂～粘質シルト層 | SD 2-1, 5YR4/1灰色中纏混り細粒砂層                 |
| 4. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質シルト層       | -2, 7.5GY2/1緑黒色細粒砂層                      |
| 5. 5Y4/1灰色 粘質細粒砂層 (木根)        | SD 3-1, 10YR3/2黒褐色粗～中粒砂層 (瓦片)            |
| SD=溝                          | -2, 10YR3/2黒褐色粗～中粒砂層 (炭混り)               |

第37図 若江遺跡第58次調査西壁土層断面図

#### 4 まとめ

今回の調査では発掘深度が浅いこともあり、近世以降の耕作土とそれに伴う溝が検出できたのみである。予想したような若江寺に関する遺物の出土はみられなかった。若江遺跡第65次調査(西側の集合住宅地)に期待したい。

#### 注

(1)吉村博恵「若江遺跡第25次発掘調査報告」1987年 (財)東大阪市文化財協会

#### 調査参加補助員氏名(順不同)

西脇順三、石賀信宏、青山純也、岡本 郁、桧下 晋史、福山 幸一、藤井 文子、  
杉本 友美、大舟 美知子、田中 明美、市原 牧、岸田 智子、宮崎 清美、  
井上 未来、本田 けい子、今井 喬子、藤崎 博子、中川 義夫、中村 順一朗、  
北野 正樹、榎本 雅則、奥座 晋

## 第10章 参考資料・日下遺跡第14次調査報告

### 1 はじめに

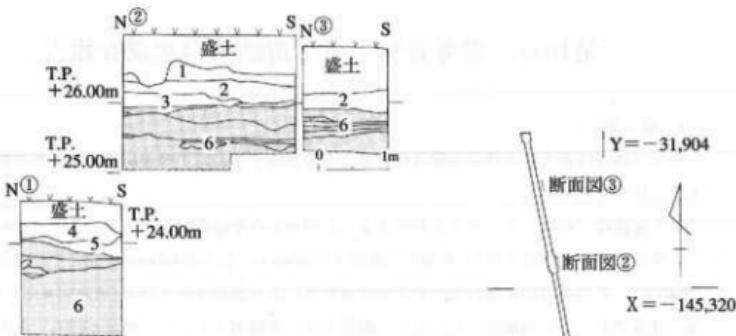
今回の調査は東大阪市建設局建設総務部土木公営所下水道河川維持係による下水道管渠塗造工事に伴うものである。

日下遺跡は「貝畠」などの字名が示すように田畠から多量の貝が出土することで知られていた。今回の調査地は日下町2丁目地内の道路上に幅60cm、長さ約100mのトレンチが設定された(第40図)。その周辺は帝塚山大学考古学研究室等により調査されている(第38図・印)。縄文時代の貝塚であることが確認され、また、埋葬人骨が多数出土し、その価値が認められ国史跡指定を受けている。当地点は市の指定地に隣接している。

調査に先立っておこなった試掘では縄文時代の遺構・遺物については確認できなかつたが、伊万里片・平瓦片・須恵器細片の出土がある。また、調査地南部に河道の存在が想定できた。掘削は現地表面から1.6~2.0mまで機械と人力の併用でおこない、おもに土層断面の観察、遺物の有無を確認した。期間は平成6年5月23日~平成6年6月6日である。



第38図 調査位置図



第39図 土層断面図

## 2 調査結果(第39図)

X = -145,340

第1層茶褐色砂質土層、第2層暗灰色粘質土層、第3層暗茶灰  
色砂質土層、第4層黒褐色粘質土層、第5層茶褐色砂質土層が  
堆積する。第2層～第5層中より陶磁器片、土師器片が小量出  
土し中世～近世の遺物包含層といえる。第1層～第5層は調査 X = -145,360  
地を北上するにつれ堆積する。その下層は管底まで砂層が堆  
積する。灰褐色～茶褐色細粒砂～粗粒砂で部分的にラミナが  
見られる。調査地南端では、盛土以下管底まで砂層及び径0.5  
～1m程度の川原石が堆積している。調査地全体を通してこの  
砂層からは遺物は出土していない。土層断面の観察から当調  
査地の大部分は谷にあたると考えられる。

なお、出土遺物は図化できるものはない。

X = -145,400

## 3まとめ

工事の設計上、現地表面より2m以上の掘削はできず、縄文  
時代の面には届かなかった。そのため断定はできないが、お  
そらく谷の堆積層が下方に続くものと考えられる。●地点(第  
38図)では合計10体の人骨が検出され、それらは「遺跡の西  
縁に居住区をとりまくように弧状ないし環状に墓地区が形成されてい  
たのではないか」と考えられている(春成1985)。今回の谷の存在は、それらの墓地区を巡って  
いた可能性を指摘できる。居住区、墓地区、さらに地形を利用した集落間の区画等が次第に明  
らかになることが望まれる。

## 文献

春成秀爾(1985)弥生時代畿内の親族構成、国立歴史民俗博物館研究報告、第5集

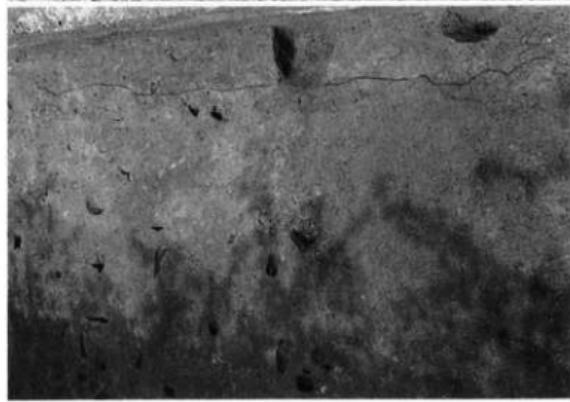
# 図 版



1. 北壁断面上部



2. 東壁断面上部



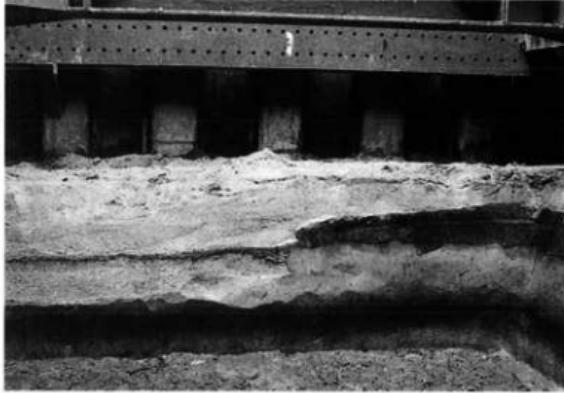
3. 鳥畠状遺構と足跡



1. 東壁断面中部



2. 蝋跡



3. 北壁断面下部



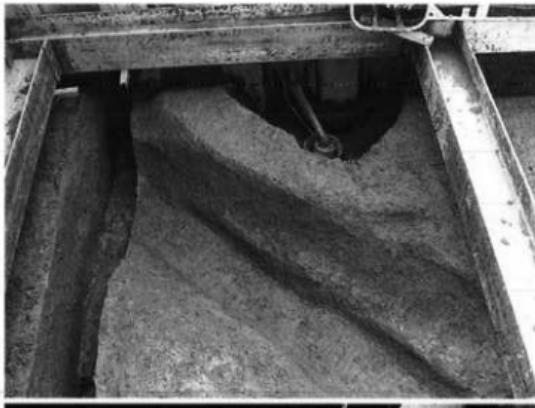
1. 東壁断面上部



2. 東壁断面中部



3. 東壁断面下部



1. 坪境溝 1



2. 坪境溝 1 断面



3. 井戸 1



1. 敦溝状遺構

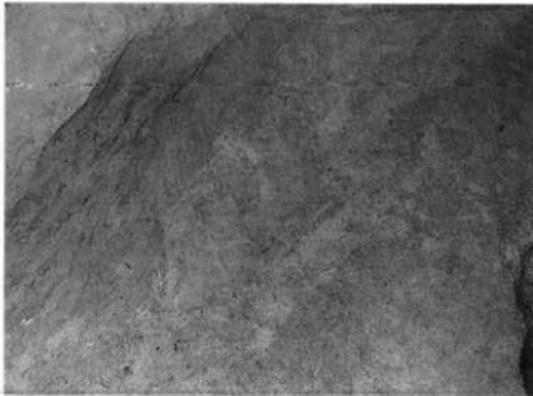


2. 杭列

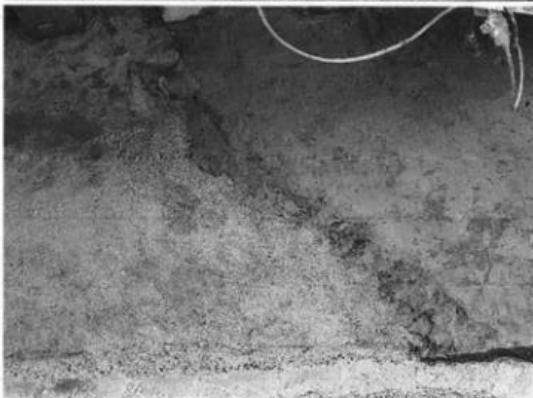


3. 旧河道1内遺物出土状況

國版第六  
池島遺跡第14次調査



1. 旧河道1



2. 旧河道3



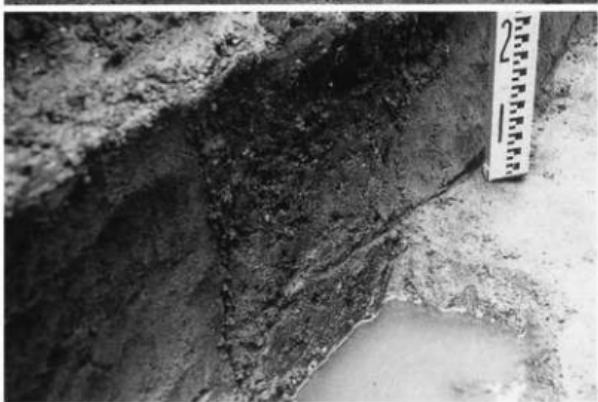
3. 調査地近景



1. 調査風景

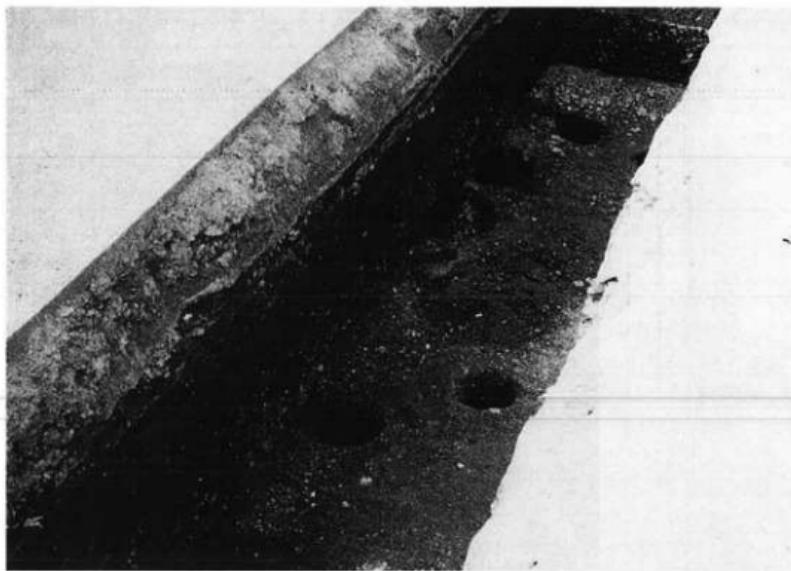


2. ピット検出状況

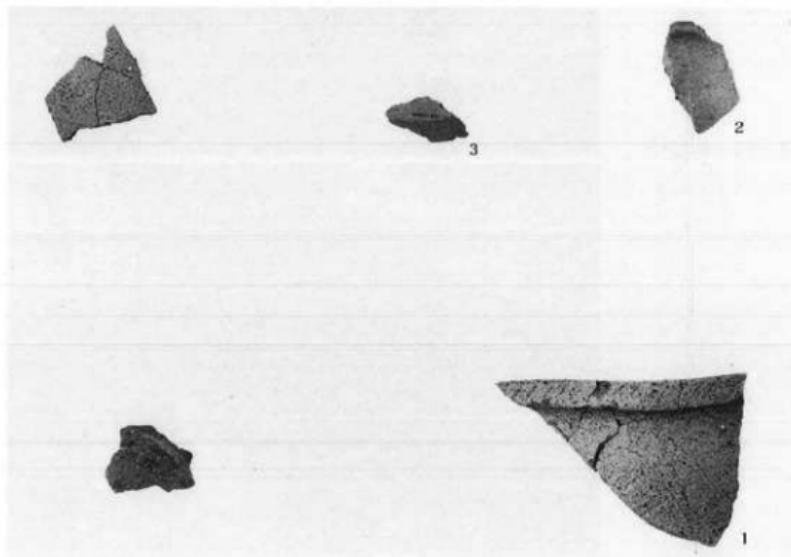


3. ピット断面

図版第八 西ノ辻遺跡第37次調査



1. 遺構検出状況



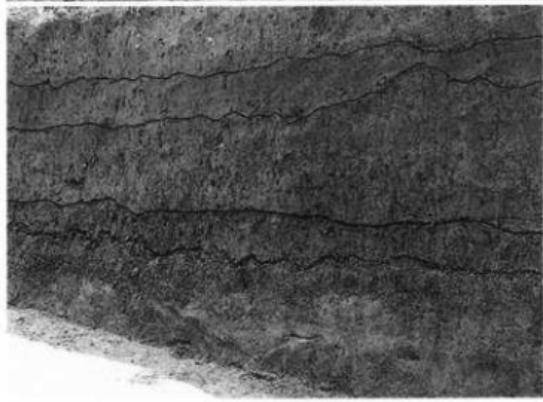
2. 出土遺物



1. 東壁斷面



2. 東壁斷面



3. 東壁斷面



1. 調査地近景



2. 溝6



3. 土壌1

圖版第十一 瓜生堂遺跡第39次調查



30



30'



19



22



19'



24



27



43

圖版第十一  
瓜生堂遺跡第39次調查



37



39



40



34

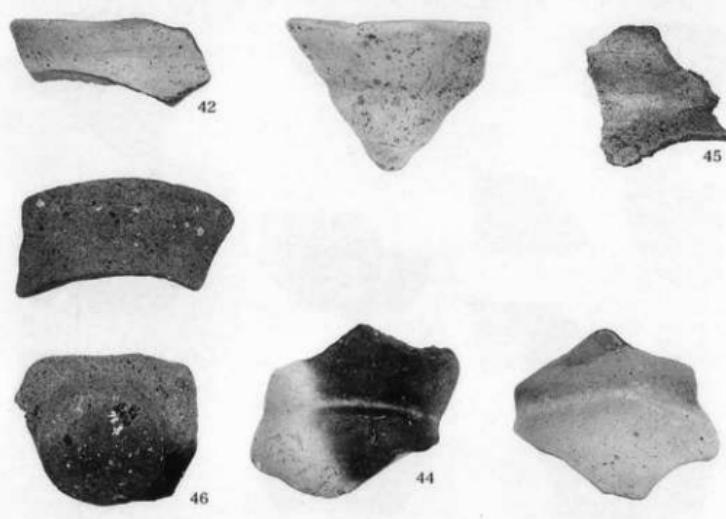
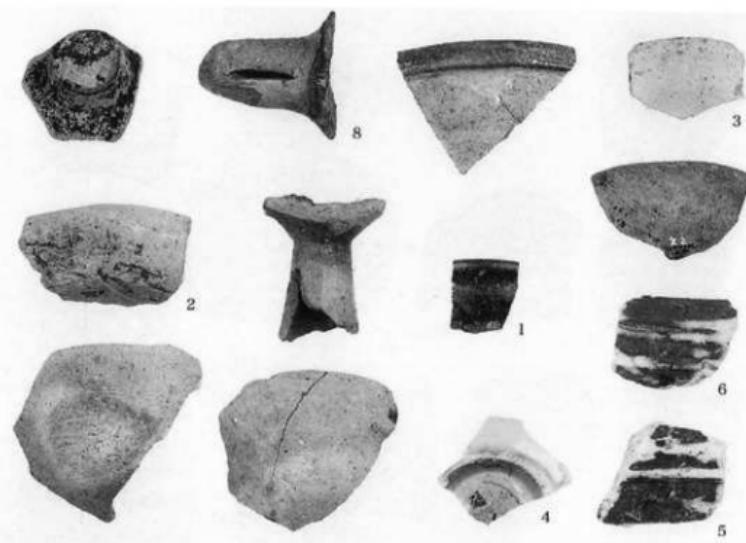


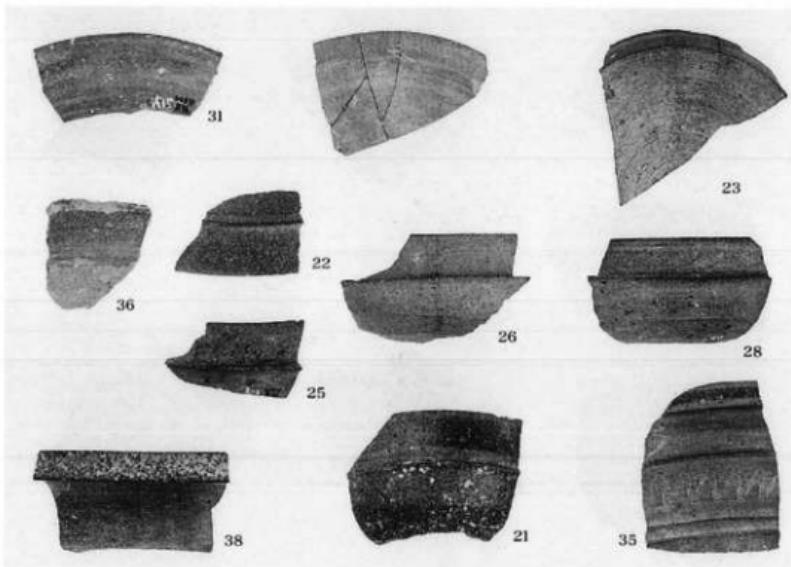
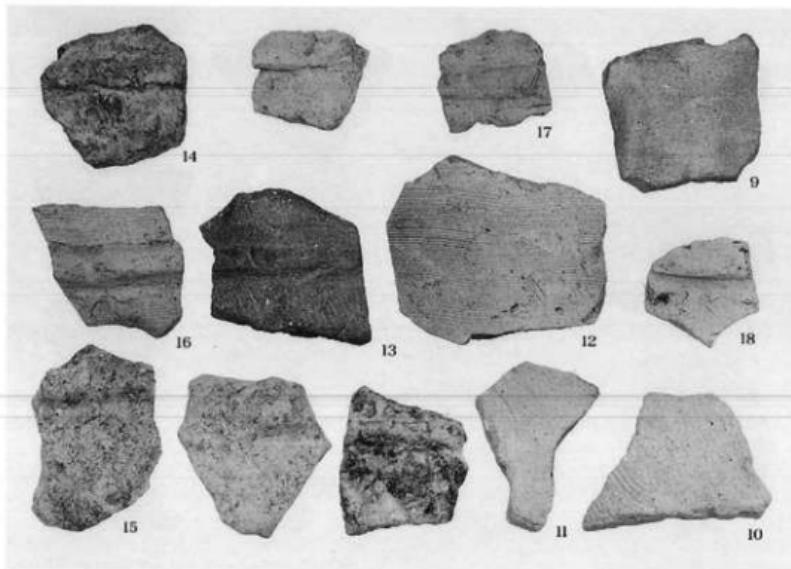
41



32

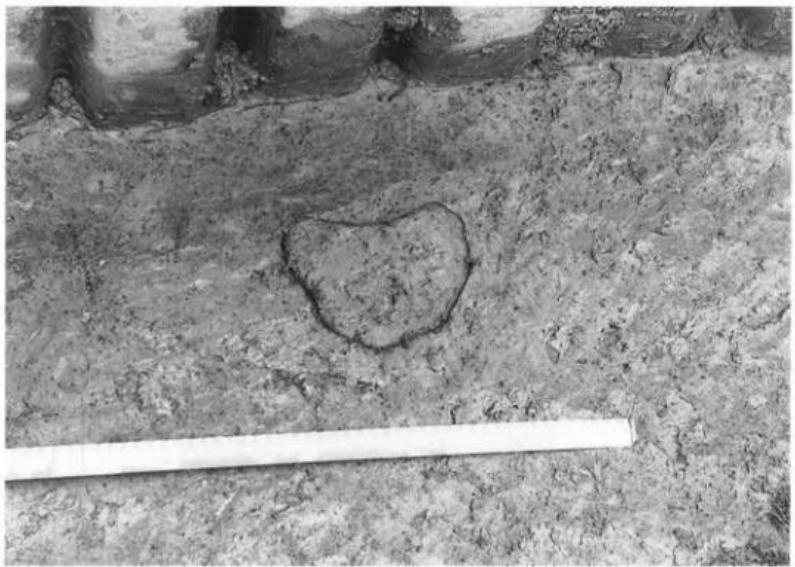
圖版第十三  
瓜生堂遺跡第39次調查







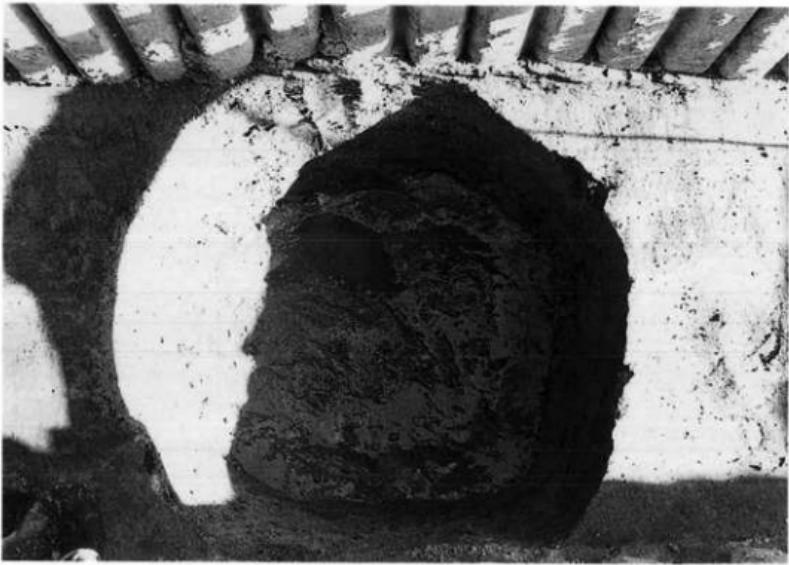
1. A地区東端断面



2. A地区東端ピット



1. A地区中世遺構



2. A地区中世井戸

圖版第十七 若江遺跡第56次調查



1. A地区調査風景



2. A地区弥生遺構



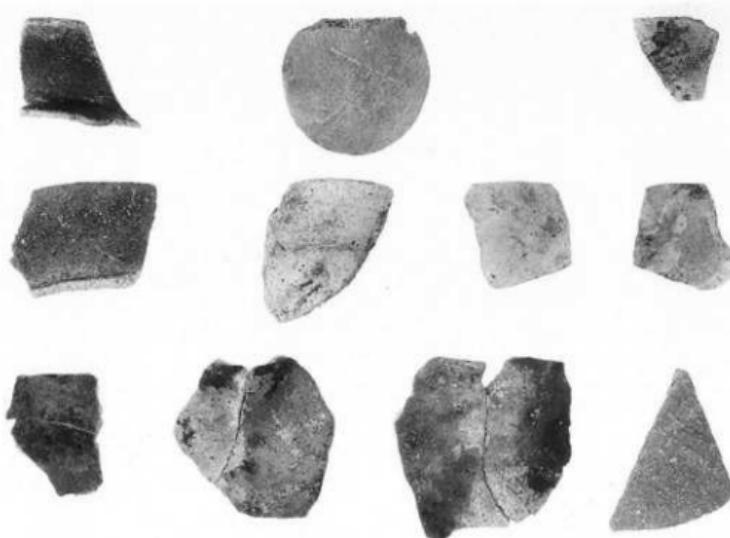
1. C地区近世土壤



2. C地区検出ザル

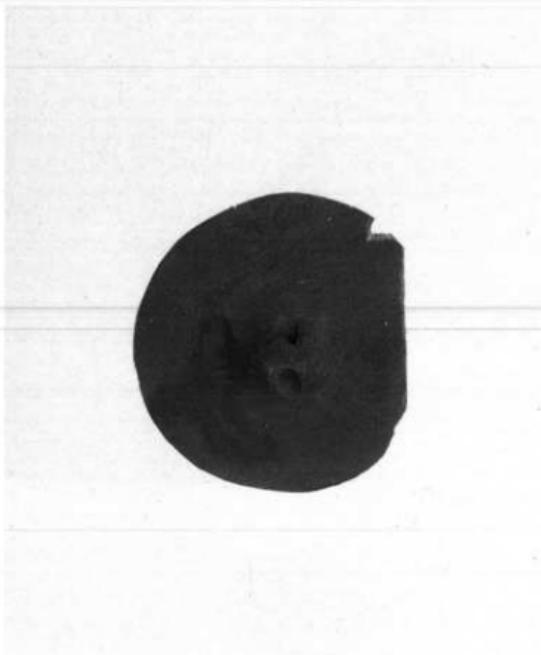


1. C地区石製模造品出土断面

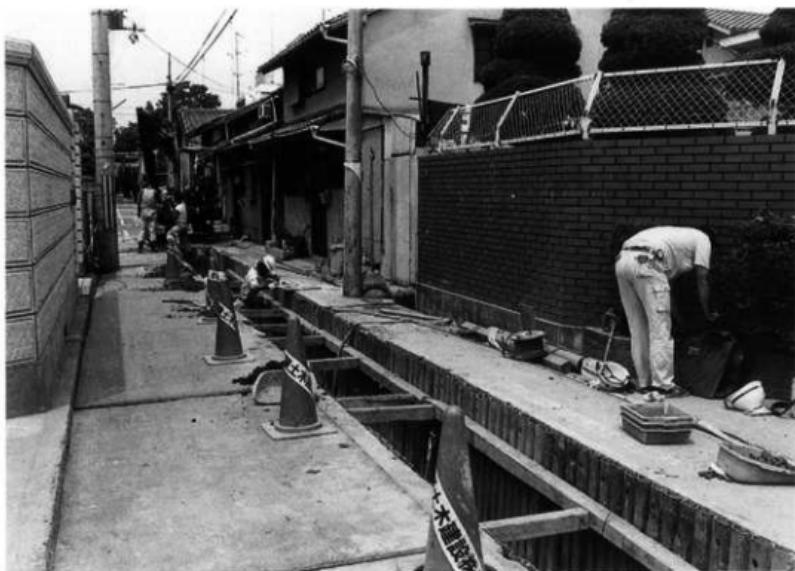


2. C地区石製模造品及び供伴土器

図版第二十 若江遺跡第56次調査



鏡形石製模造品



1. A地区調査風景



2. B地区作業風景

圖版第二十二  
若江遺跡第56次調査



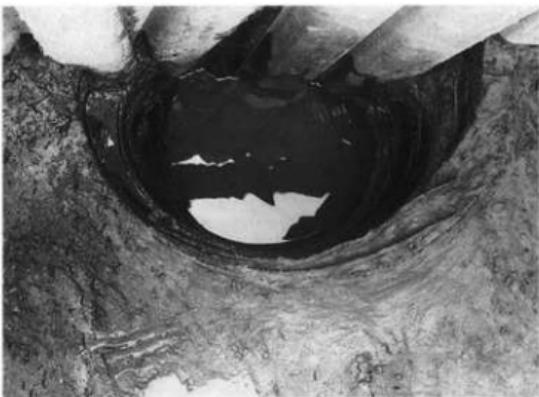
1. D地区東壁断面



2. D地区東壁断面



3. D地区暗渠



1. D地区井戸



2. D地区溝



3. D地区溝断面



1. D地区土壤

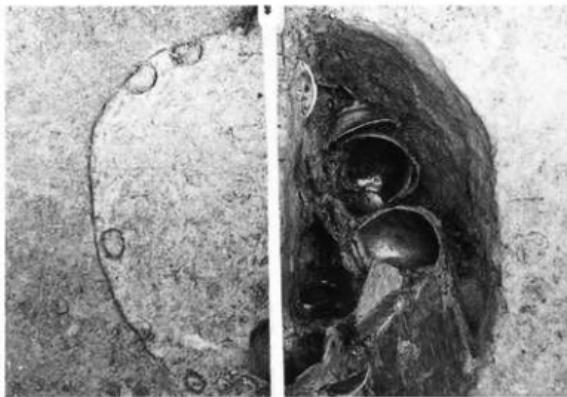


2. B地区瓦・木積み遺構



3. B地区溝1

1. 土坑1  
検出状況及び  
遺物出土状況  
(上が北)



2. 土坑1  
遺物出土状況  
(上が北)



3. 土坑1  
完掘状況  
(上が南)



圖版第二十六  
若江遺跡第58次調査



1. 西壁土層断面



2. SK1検出状況



3. 北側調査風景  
(北から)

東大阪市下水道事業関係  
発掘調査概要報告

—1994年度—

1996年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会  
東大阪市荒川3-28-21  
TEL 06-736-0346  
印刷 株式会社近畿印刷センター